
VK (ヴァンパイアキラー) ヴァイアント

北岡 白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァンパイアキラー
VKヴァイエント

【Nコード】

N5235W

【作者名】

北岡 白

【あらすじ】

時の支配者は吸血鬼ヴァンパイアであった。人々に抗う力はなかった。しかしヴァンパイアを倒せる者の存在がいた。その存在はダムピール。ヴァンパイアと人との間に生まれし灰色の存在。

15歳の少女マリー・フローベルはヴァンパイアに襲われる。そして目の前で家族を殺され、自らも強姦される。運よく、命だけは助かったマリー。しかし彼女の心には大きな傷と復讐の憎悪が生まれた。そしてヴァンパイアを狩ることを生業にしているダムピールが住むデブリの街を訪れる。そして自分と家族の仇のヴァンパイア

の抹殺を依頼をするが誰も引き受けてくれなかった。なぜならマリーを襲った連中はヴァンパイアの中でも最古からの権力を持ったデルモンド一族の者であったからである。途方にくれるマリー。断られ続けながらも何度も何度も頼み込む。しかし結果は変わらなかった。ある日、マリーとハンターのやり取りを見ていた街の住人がマリーにある噂を教える。街のはずれの山の頂にどんなヴァンパイアでも殺すヴァンパイアキラーが住んでいると。そしてマリーはその噂をたよりに山の頂上を目指す。

プロローグ

絶対恐怖。

それは捕食者の存在。被食者にとってそれは避けられない。

人は英知を駆使して食物連鎖の輪状から外れ、地上で絶対捕食者として君臨しているように思えた。

それは表面上の出来事に過ぎなかった。

人は被食者であった。

そう……人は吸血鬼^{ヴァンパイア}の被食者にすぎない。

その存在に恐怖する。絶望する。

そして奴隷という名の家畜に成り下がる。

高度な知性と強靱な身体能力を持つ人に似て非なる存在に捕食される。

生物の君臨者はヴァンパイア。人々はそう思った。ヴァンパイアもそう自負していた。

しかしそれもまた真実ではない。

人とヴァンパイアの間生まれし灰色の存在を忘れてはならない。

どちらにも受け容れられない。

どちらにも属せない。

なぜならどちらも脅かす存在だから。

それを人々はダムピールと呼ぶ。

一章 一節

はじめまして。私、サイツアーベアリムと申します。

皆は私の事をサイツと呼んでおりました。私が若いころ靴職人としてデブリの街に放浪の旅をしていたときの出来事です。それは衝撃的で、今でも鮮明に覚えておりますとも。

デブリの街は通称「狭間の街」と言われておりました。

どうしてか？ といいますと、その住人が特殊な事情の人ばかりだったからです。人口1万人ほどの華やかな街でした。しかしその華やかさには妖艶なものから心温まるものまで様々で、それはそれは混沌としておりました。なぜなら人口の半分以上がダムピールでしたから。

そうそう知っておりますか？ ダムピールのことを？

知らない……… そうですね。ではダムピールについて少々お話ししましょう。

とはいえ、いきなりダムピールのことを話してもお分かりにくいと思いますので、幾つか説明しておきましょう。今の時代どうなのか私には分かりませんが私が若い頃、人は犬や猫はたまた牛や豚のように扱われておりました。

実は昔、人は家畜か愛玩動物でしかなかったのです。

では何者か？ といいますと吸血鬼ヴァンパイアにございます。

その時代、時の支配者はヴァンパイアでございました。ほんとヴァンパイアは未恐ろしい存在でした。血を啜り人を殺しまくると思えば、人を服従させ下僕にして駒にする者。中には愛玩動物に仕立て性欲を満たすものもあり、人にとってそれはそれはとても住みにくい時代でございました。

しかもヴァンパイアときたら強いのもので腕に自信のある男が何人も挑みましたが全く歯が立ちませんでした。人々はそれを目の前にしてというもの抗うことをやめてしまいました。

しかしヴァンパイアとて無敵ではございません。弱点もございました。抗って勝てる可能性がないわけではございません。ただし多くの犠牲を払いますが……。

しかしそんな時代ではございますがヴァンパイアと肩を並べる、いやそれ以上かもれません。

ヴァンパイアにも天敵がありました。

それがダムピールでございます。

ダムピールとはヴァンパイアと人の間に生まれた灰色の存在にございます。皮肉な事ですが人は自分たちを脅かすヴァンパイアの力に頼らないとヴァンパイアを倒す力を手にする事が出来ないのです。そしてヴァンパイアも。下等と思っっている人との間に生まれし者が自分たちを脅かす存在なるとは……運命とは不思議なものです。

さて、みな様、ここまの話を聞いて疑問が出たのではございませんか？

どうしてヴァンパイアを脅かす存在のダムピールが「狭間の街」なんかに住んでいるのでしょうか？

実はダムピールには、ある特徴がございます。

それはダムピールは死んでしまうとヴァンパイアになってしまうのです。

しかも我を忘れ、たちの悪い事に本能のままに人を襲います。襲う人たちは生前に関わりの強い人が多いようです。そして生前知った顔の人たちの襲い生血を吸う。稀に吸血行為でなく性行為へ赴く者もおりますが……まあ、どちらにしろ人に好かれる行為ではございません。

そのためダムピールのことを人々は「出来損ない」と呼び罵りました。ヴァンパイアも自らを高貴な存在と自負しておりましたので人と混ざった存在が許せなかったのでしょう。彼らは「混じり物」と罵っております。

彼らダムピールは弱い存在でございました。どちらからもその存在を受け容れられない。彼らが罪を犯したわけではございませんに。

そうやって迫害されたダムピールが一人、また一人と安息の地を求め集って出来た街がデブリの街こと「狭間の街」の所以でございます。

デブリの街には様々な悩みを持った人達で賑わっております。その悩みを持つ人々はどこか悲しくもありましたが、それ以上に魅力を持ち合わせておりました。特に私が印象的だったのはダムピールの男性と一人の人の少女でございます。今でもよく覚えておりますよ。まるで昨日のように。

そう、あれは今日のように寒い寒い吹雪の夜でございました……

1476年12月23日 サイツアーベアリム・ブラド 日記より

一章序

ここ、デブリの街こと狭間の街は、街明かりが夜をも照らす眠らない街。真昼間もお構いなく犯罪が起こる街。善と悪の狭間に佇む街。

12月の暮れ、白い雪に覆われたデブリの街でもクリスマス準備で賑わいをみせていた。そんな街の賑わいの中に1人の少女が俯き加減にふらふらと街を歩く。下を向いて顔ははつきりと見えないが栗色の綺麗だったと思われる髪は無残に乱れている。服もあちらこちら破れ半身、裸に近い露な姿であった。そして露出した肌は青紫に変色し打撲のような痕がいくつもみられた。そして左手には金属のブレスレットがはめられていた。そのブレスレットは手錠のように施錠されている。それは吸血鬼の愛玩動物を意味している。そして少女は凍るように冷たい街のタイル路を素足でとぼとぼと歩く。足は凍傷をきたしていた。しかしその様子を心配する者はいなかった。不振がる者もいなかった。そして手を差し伸べる者すらいない。それが狭間の街と呼ばれるデブリの街。

少女は街のはずれにやって来た。

「この山を越えたら私の望みが叶う」

自分に言い聞かせるようにひとり呟いた。

少女の顔が歪む。

山は雪に覆われている。冷たく痛いタイル路より遙かに山の積もった雪は少女に痛みを突き刺す。このヨーロッパの大地に頂く山岳を防寒具、一切纏わない格好で挑む少女の姿は無謀であった。だが彼女から、こみ上げる熱い意志が彼女を前へ前へと突き進める。

少女は頑張った。しかし自然はそれほど甘くはない。登るにつれ吹雪は強くなり視界は遮られた。山の中腹であろうか、とうとう少女の気力と体力は限界を超えた。そして意識が薄れていった。

少女は思った。

ここで私は死ぬんだ。
神様どうして私にこんな残酷な仕打ちをされるのですか？

……

マリー・フローベルはゴシック様式の美しい一室のベッドの上で目を覚ました。

パチ …… パチ ……

パチ …… パチ ……

暖炉から小刻みに、燃える薪の音が疲れた身体に心地良い。
ふと我に返る。

私は死んだの？ ここは天国？ 一瞬考えたが、暖炉から伝わる丸味のある暖かさはマリーを現実へと押し留める。

ゆつくりと部屋を見渡す。部屋中の中央に丸いテーブルがあった。その上に自分が着ていた服の原型を留めない襪はくわ切れが綺麗にたたんであった。マリーの記憶が混乱する。もしかして私、何も着ていない？ 急いで自分の身体を見る。いつの間にか、男性用のシルクで出来た白いシャツを着せられている。マリーは左手を見つめた。冷たいブレスレットは今も取れていない。脳裏に負の感情が過ぎる。ブレスレットを見つめ呟いた。

「結局…… 捕まってしまったのね。こんな事なら死んでしまえばよかった」

マリーの頬を涙が伝わる。そしてベッドの上に横たわる華奢な身体が小さく小さくなっていった。

部屋の中は静まり返った。

そして再び

パチ …… パチ ……

パチ …… パチ ……

暖炉の中で燃える薪の音が部屋を支配していった。
それから1、2時間ぐらいが経過しただろうか？

トントン！

「！」

マリーは毛布の中に身体を丸める。

トントン！

突然、ドアをノックする音が静まり返った部屋に響く。

ガツチャ

真鍮製の扉の取っ手がゆっくりと回る。

床に敷かれた絨毯を踏む靴音が近づく。

靴音はマリーのベッド前で止まる。

マリーを覆う毛布がゆっくりと剥がされる。

「ひっ！」

小さな悲鳴があがる。

「起きているとは思わなかったんだ。驚かせてしまった。悪かったね」

どうやら男のようだ。声は穏やかな口調だった。マリーは恐る恐る目を開ける。

マリーの前には屈託のない笑顔を向ける青年がいた。青年は黒髪に黒い瞳を宿していた。そして細く整った顔立ちと身体、髪と瞳に同調するように黒い執事服が良く似合っていた。

全体の黒の中にシルクの白シャツがアクセントを付けていた。どうやらマリーが今着ているシャツは彼の持ち物のようだ。マリーの視線がシャツに向いていることに青年は気付いた。

「ああ、服が濡れていたんで着替えをと……ただ、この屋敷は男しかいないから女性用の服がなくて……」

青年は苦笑いしながらマリーに説明する。マリーはきょとんして青年の話聞いた。どうやらマリーは早合点してしまったようだった。自分でもだいぶ参っているのだろうと思った。少し落ち着いたマリーは黒髪の青年に尋ねた。

「あの……すいませんが、ここはどこなんですか？」

「ああ、ごめん。ここはVJの屋敷さ。ああっ、それと僕はここで執事をしているパーソン。宜しく」

黒髪の青年はパーソンと名乗った。それによく分からない屋敷の名も。

「パーソンさん、VJの屋敷って……？」

「パーソンでいいよ。みんな僕の事はそう呼んでいるから。フランクに話すパーソンにマリーは不意打ちをくらった。

「そ、そんな、私より年上の方をそんな風に呼べません」

「別に構わないよ。それに「さん」付けて慣れてなくて、こそ痒いよ。そうそう、そう言えば君の名前を知らなかった」

「申遅れました。私はマリー・フローベルと言います」

「じゃあ君のことはマリーって呼ぶから僕の事もパーソンって呼んでよ」

「わかりました。パーソン、ところでVJの屋敷っていうのは何ですか？」

「ここはヴァイエント・オリマードJrの屋敷。名前が長いから通称VJの屋敷。なんでVOJじゃないの？って言う突っ込みはいらないからね」

自分の会話につけたらしく、けらけら笑うパーソン。しかしマリーの反応は別の場所だった。

「ヴァイエント！」

その言葉を聞いて毛布を握り締めていたマリーの手がぶるぶると震えだす。

「も、もしかして。こ、ここはヴァンパイアキラー様の住まれる屋敷ですか？」

興奮のあまり上手く喋れない。

「そう。ここはヴァンパイアキラーの屋敷だよ」

「あ、ああ、そ、そ、その……」

さらに興奮が高まり、口が呂律して言葉にならない。

その光景を見たパーソンは先ほどのチャラけたムードがなくなり

急に真顔になった。

「マリー。話したい事は色々あると思うけど、流石に山で遭難しかけたんだ。心も身体も疲れている。どのみち今日は面会出来ない。だから明日に備え今日はゆっくりとお休みなさい」

すべて分かっていたようにパーソンがマリーを諭す。

パーソンの言葉が効いたのかマリーは落ち着きを取り戻していった。

……

……

「あの、遭難していた私を助けてくれたのはパーソンなんですか？」

「いや、僕じゃない。助けたのは、この屋敷で働く同僚さ」

「そうですか。明日、その方にお礼を言わなくちゃ。会わせてもらえますか？」

「もちろん」

「ありがとうございます。それではパーソン。私、明日に備え休みます」

「うん。それが良い」

「パーソン、おやすみなさい。そしてありがとう」

「おやすみ、マリー。君に良い明日が来ますように」

パーソンは部屋を出た。退室際もマリーへ笑顔を絶やさなかった。再び部屋はマリー一人となった。

パチ …… パチ ……

パチ …… パチ ……

暗黙に戻った部屋、再び薪の燃える音が戻る。

「パーソンか……」

マリーはベッドから天井を見上げ呟く。

もう随分と経つ。人の温かみに触れたのは。久しく愛情に飢えた身体にパーソンの優しさが沁みた。左手を天井に翳し、ブレスレットを見つめた。このために私はここまで来たと。そして安堵に満ちたマリーに、今まで黙って様子を観ていた疲労が一気に騒ぎ始める。

そしてマリーは久しぶりの暖かいベッドで心地良い深い眠りについた。

館の別室。

「どうだった？ あのガキんちよは？ 見たところ金も持ってなさそうだし、ガキだから相手も出来そうにねえ。悪いが明日でさよならだ」

野太い声の男がソファに座り、ぶどう酒片手にパーソンと話していた。

「ファースト、実はまだ君に言っていない事があるんだ」

「ほお、もしかしてブレスレットの事か？ たしかにブレスレットの刻印は俺らにも関係あるが、娘と俺らの間には何ら関係はねえ」
ファーストを呼ばれた男が答えた。

「いや、それとは違う。もっと重要な事だよ。……彼女、2回目なんだよ」

「おいおい」

ファーストの持っていたグラスの動きが止まる。

「100年ぶりだよ」

「まさか、あんなガキんちよがか？」

「ぼくも最初、驚いたよ。疑ってみたが、やはり間違いない」

「そうか。それが事実なら色々せねばならんな」

「ああ、そうだね」

ファーストはグラスを手で転がしながら揺れるぶどう酒を見つめながらパーソンに言った。

「……事実だったとして、前回の失敗があるからな。明日、俺の目で確かめてみる。慎重に越した事はないだろう」

「確かにそうだね。ところでファースト」

「なんだあ？」

「もし受け容れた場合、彼女どうする？」

「そうだな……」

一章？

現在、マリーはデブリの街にいる。

経緯はこうだ。

昨日の遭難から一転し、VJの屋敷で一夜を明けた。結局、目覚めたのは午前10時過ぎだった。今までの疲れから一気に解き放たれたようだった。それから間もなくしてパーソンがマリーの部屋を訪ねた。街で買った婦人服をマリーに渡し、着替えたら一階の食堂へ来るように言われた。マリーは婦人服に着替え、一階の食堂へ移動する。

食堂ではパーソンがマリーのために食事を用意してくれた。もう何日もともに食事を取っていなかったマリーは勢いよく食べる。いや食べるというより大男が食い物をガツつく光景に似ている。それほどまでに飢えていたのだ。その光景をパーソンはにこにこしながら見つめる。パーソンの視線に気付きマリーは赤面し食事の速度を緩めた。さらにパーソンはにこにこする。

食事も終わりパーソンの入れた紅茶を飲み、ようやく一息ついた。「マリー、この後なんだけどね。ある人に会ってもらおうと思う」「マリーの飲みかけの紅茶をテーブルに戻す。

「あの、それって？ ヴァイエントさんですか？」

「うーん。当たりのような、ハズレのような」

「????？」

困惑するマリーを見て笑うパーソン。

「まあ、会えば分かるよ」

そう言われパーソンにファーストの部屋まで連れられたのが4時間前となる。

屋敷、本館二階の東にある部屋。

「……」

マリーの前に男が机に肘を突いて手を組んで椅子に座っている。男はがっしりとした体つきで凜々しい印象を受けた。そしてヴァンパイアハンターが好んで被るハンター帽を深く被っている。帽の間から覗く赤い癖毛と鋭く光っている眼差しから屋敷の主とマリーは感じた。

さらに目を引くのは、今居る部屋の様子である。部屋一面にある本棚はぎっしりと本で埋め尽くされている。この屋敷に相応しい書斎に見える。がしかし男とマリーの間には直径10センチもある鉄の棒で出来た鉄格子が存在する。その鉄格子を挟んで男とマリーは座っているのである。そして男の前には立派な机があり、マリーの目の前にある小さな机とピッタリと合わさっている。そして机と机の間に縦20センチ横30センチほどの空間が存在する。丁度、食事用の大皿1枚が通れる大きさだ。それはまるで囚人の牢屋のような、両替商が営む金庫のような、重々しい雰囲気だったのだ。さらにマリーの座っている場所の右手には2つの部屋を結ぶスライド式の檻の扉があるのだが、不思議なのは鍵の施錠側がマリーのほうに付いているのである。

そしてその扉の位置のさらに奥、あるものが不気味に存在を強調していた。

棺桶である。棺桶はヴァンパイアの就寝道具である。しかしダムピールには必要ない。いや、その前にこの男が人なのかダムピールなのかすら分からない。もしかしたらどちらでもない可能性もある。このダムピールの住む街でヴァンパイアキラーを名乗る者、ただそれだけでダムピールと決め込んでしまっていた。しかも壁に立て掛けられ棺桶の周りには鉄の柱やら、ボルトか、くいか分からないパーツが幾つも組み合わせあって、棺桶を覆い尽くす大きな鍵となっていた。

まさに牢屋だった。そして牢に閉じ込められているのはマリーでなく男のほうなのだ。一体全体どうなっているのか部屋に入ったマ

リーには分からなかった。

「ファーストだ」

突然、男が喋った。

「えっ？」

「ファーストだ。この屋敷の責任者だ」

『ヴァイエント・オリマード』じゃない。どうゆう事？』

ファーストの鋭い眼は少女の微妙な表情を逃さない。

「ヴァイエント・オリマード」は我々の雇い主であって殺し屋で
はない。ヴァンパイアキラー

「雇い主？」

「そうだ。彼は雇い主に過ぎない。そして殺し専門は俺らの仕事だ。俺は仕事に関しては、全ての権限を持っている」

「じゃあヴァンパイアキラーというのはあなたのことですか？」

「街の噂ではそういう事になるが実際は俺らだ。そもそもハンターが殺らないようなヴァンパイアを殺るんだ。一人で勝てる相手じゃない。それともヴァンパイアキラーは超凄腕のハンターと思ったか？ 俺個人も強いが相手が相手だ。俺らは街の小遣い稼ぎどもとは違う」

ファーストの話を聞いて、確かにそう思った。ハンターが引き受けない仕事をするのだ。そうなると相手の主流は大物となる。相手は部下を引き連れている。1対1の戦いということは限らないのだ。

「では、ファーストさんに依頼を頼めば引き受けてもらえるのですか？」

「ああ、ただし、それなりの対価を頂く。で、穰ちゃんはどれくらい支払ってくれるんだ？ちなみに死にかけてまで遠路遙々、山に登ってくる奴は腐るほどいる。大抵そのままお帰りコースだが。で今いくら持つてる？」

「その…今はお金持っていないません……でも、ちゃんと働いてお金払いますから」

ファーストの口元がニヤッと開く。

「3千万クラウンだ」

「さ、さ、3千万!」

マリーの声が裏返る。要求された金額はあまりに高額であった。家族の平均年収が2万8千クラウンである。一生かかっても支払えない額である。

「あ、あの。その、そんな大金……。あのお金の代わりになるものは……」

「ああ、あるぜ。身体で支払ってもらうこともある。ただし18歳未満はお断りにしている。どう見ても穰ちゃんは歳が足りてないよっに見えるが。歳はいくつだ?」

「……昨日で16歳になりました」

「そうか。それはおめでとさん。残念だが誕生日プレゼントにしてやることはできねえ。仕事は仕事だからな。まあ祝いに今着ている服を持っていきな。それじゃ話はここまでだ。さあ帰った帰った」
ファーストがマリーに退室するよう手でジェスチャーする。

「ま、待つてください。なんでもしますので、依頼を引き受けてください。それに私にはもう帰るところがないんです」

「だろっうな。穰ちゃんみたいな^{輪っか}ブレスレット付きの事情はよく知っている。だがそれとこれとは別だ。街には穰ちゃんみたいなのがわんさかいる。この街まで奴らも追ってこまい。下手に逆らうより、ずっと安全だぜ」

「……」

「……それに穰ちゃん。その輪っかを付けた相手を知ってるか?」

「……いえ、知りません」

「その輪っかに刻まれた紋章はベルモンド家のものだ。ベルモンド家は最古から続く純血の一族だ。吸血鬼世界でも強い影響力を持つ。そんな奴に牙を向く奴なんて誰もいねえ。色々辛い目にあっただろうが、生まれ変わったと思って、この街で一から始めたらどうだ?」

たしかにそうかもしれない。自分の目の前で家族を殺され、そし

て犯され愛玩動物の印まで押された。しかし今こつやっ生きている。そして、この街に居れば、そんな事から開放されるかもしれない。

仮にファーストが依頼を引き受けてくれたとして倒せる相手なのか。

いや敵う見込みはないだろう。

どんなにこのヴァンパイアキラーが強くても相手は最古からの君臨する一族。そんな奴らに敵うはずはないだろう。

敵う相手でないだろう。

でも…

それでも…

たとえ殺されたとしても。

「それでも… 私には自分と家族のために仇を討ちたい」

しばし沈黙となった。

「仇を討ちたいそうだ。どうするよ？」

沈黙を破ったのはファーストだった。

そしてファーストの居る部屋、マリーから見て左端に位置する扉がゆっくりと開く。

現れたのはパーソンだった。

「なんとかならない？ ファースト」

「相手が相手だぞ？」

「僕らはどんなヴァンパイアをも狩るヴァンパイアキラーじゃなかったの？」

痛いところを突かれたようでファーストの顔が渋った。

「流石にタダという訳にはいかねえ」

「そうだファースト。いい事を思いついた」

そう言うとパーソンがファーストの耳元で何か喋っている。そ

れに答えるようにファーストが頷く。

それから程なくファーストが机から羊皮紙を取り出し、羽ペンで何やら書き始めた。数分ほどして書き終わると封蝋と印璽を使い手紙の封が閉じられた。

そして鉄格子の開口からマリー側にある机へ手紙を投げた。

「服の仕立屋『ルー』と言う名の店。そのマリーダという女に手紙を渡せ。未払い金の請求が書いてある。その場で金をもらうか、マリーダを屋敷まで連れてくるかどちらかしろ。そしたらお前の依頼を考えてやってもいい」

「ほんとうですか」

「ああ、ほんとうだ。ただし金か女、貰ってくるか連れてくるかしないと話はチャラだ」

「わかりました。ありがとうございます」

「礼ならパーソンに言つてやれ。パーソンの口添えがなければ今頃とつくに帰ってもらっているところだ」

ファーストはそう言うつとパーソンが入ってきた扉を使って部屋から出た。

部屋に残されたマリーをパーソン。

「マリー、よかったね」

「ありがとうパーソン。ファーストさんに取り持つてくれて」

「いや、そんな事はないよ。なんだかんだ言つて最終的にファーストが許可を出したんだから、あくまで僕は一意見を提案しただけに過ぎない。お礼なら、ちゃんと仕事を果たした後にファーストに言つてやつてね。ああ見えてシャイだから」

「はい」

「それじゃあ、屋敷の門まで案内するよ。あと山の夜道は危険だから街を出るのは遅くても3時過ぎまでだよ」

「わかりました」

マリーとパーソンは屋敷の門まで一緒に歩いた。

「あの、ひとつ聞いてもいいですか？ ファーストさんもパーソン

もダムピールなんですよね？」

門まで行く道中、ふとマリーは尋ねた。なぜならファーストの居た部屋にあった棺桶が気になったからだ。

「そうだね。上手く言えないんだけど僕は人間、彼はヴァンパイアなんだ」

「えっ」

「びっくりしただろ。実は僕たちダムピールじゃないんだ」

正直、驚いた。パーソンはともかく、まさかファーストがヴァンパイアだったとは。

「ああ、ファーストは人の血とか飲まないから。というより飲めなからね彼」

「そうなんですか。……ちょっとビックリしました。ヴァンパイアキラーをしている人がヴァンパイアだったなんて」

「街にいれば、じきに慣れるよ。街の人口の割合はダムピールが5割、人が3割、そしてヴァンパイアが2割、それがデブリの街なんだ」

「……」

「この街はね、どんなことでも受け容れる街なんだ。皆、それぞれの事情を抱え辿り付いた。だから、どんな種族だろうが、どんな職種だろうが、どんな事情だろうが、街は関与かこしないんだ。それが安住の地の証であり掟だから。まあ色んなのがいるから揉め事は多いけどね」

苦笑いするパーソン。マリーはまだ実感が湧かない。

門までは話していたせいで、あつという間に着いた。パーソンから蠟燭ランプをひとつ手渡された。

「一応、持って行ったほうがいい。出来ればランプは、使わないにこしたことはない。街までは道なりになっている。今はよく見えるが夜になると方向がまったく分からないから気をつけるんだよ。昨日、その辺りは体験しているとは思っけど」

「はい、気をつけます。ありがとう。それでは行ってきます」

うん、とパーソンが頷き手を振ってマリーを見送った。

マリーの姿が見えなくなる。いつの間にかパーソンの横にファーストが立っていた。

「ファースト、気になるなら付いて行ってやったら？」

「いや、それは必要ないだろう。あの穰ちゃんなら。どうせ腹すかして帰ってくるぜ」

「そうだね。今日は客人も来るだろうからご馳走の準備でもしておくよ」

「ああ、そうしてくれ。それじゃ、俺はひと眠りする」

「わかった。帰ってきたら起こしに行くよ」

「頼む」

パーソンが屋敷の方へ向きを変え、戻り始めた。

いつの間にかファーストの姿は消えていた。

一章？

服の仕立て屋「ルー」は街の商店道から外れた場所にある。「ルー」は街の中でも少ない特注品を仕立てる店であったため、路地裏という場所に関わらず容易に場所を見つけることが出来る。

マリーも人伝えに聞き、なんなく店にたどり着いた。そして店の中に入る。店内は決して広くないが豪華な造りとなっていた。カウンターに従業員の男が居る。男はマリーと目が合つと「いらっしやいませ。本日はどの様なご用件でしょうか？」と声を掛けてきた。

特注品を扱う店だろうか、マリーの年齢と成りから男は場違いな客が来たと思つたようだ。

「あの、マリーダさんと言う方はおられますか？」

「はあ、店主のマリーダはおりますが。どのようなご用件でしょうか？」

「私はファーストさんの使いで、この手紙をマリーダさんに渡すように言われたのですが」

そう言つとマリーは男に手紙を見せた。手紙に付いた封蝋を男は確認する。

「失礼しました。ファースト様の使いの方でしたか。少々お待ちください」

男は店内奥にある階段を上がつていった。それからすぐに男は降りてくる。

「マリーダ様が上の部屋でお会いしたいとのこと。お手数ですが、2階に上がつてもらえませんか？」

「わかりました」とマリーが言つと男が2階のマリーダのいる部屋に案内した。

トン トン

男が扉をノックする。「お連れしました」と男がドア越しに言う。部屋から「どうぞ」と声が返つてきた。そしてマリーは部屋に入る。

男はまたすぐに一階へ戻っていく。

部屋の中に1人の女性が立っていた。金髪の綺麗なストレートの髪をポニーテールにくくっていた。そのせいか健康的で活発そうな印象を受けた。

「あんだ、ファーストのところの使いだつてね。それで私に何の用？」

「ファーストさんから手紙を渡すように言われました。それと……」

「それと？」

「あ、すみません。手紙に内容が書いてます」

「そう」

マリィダは部屋にあるペーパーナイフで封蝋を開け、手紙に目を通す。

手紙を机の上に置く。

「用件は分かったわ。それであんだは私に何の用？」

「……はい。その言いにくいんですがマリィダさん未払いのお金を払って貰えないでしょうか？」

「あんだ、名前は？」

「マリィです」

「マリィ、私はあんだの事を知らない。この手紙は確かにファーストのものだが、仮にあんだに金を払ってファーストのところに金が渡る保障もない。だからファーストに直接、取りに来るように言ってくるな」

「それは困ります。もしお金が駄目でしたら一緒に屋敷まで来てください」

「はあ？　なんで私があんだと一緒に山登んなきゃいけないのよ」

マリィダの声が強まる。

「そ、それはファーストさんに言われたんです。お金と貰うようにか。屋敷に連れて来るようにかと」

「なんでよ」

「そ、それは……」

マリーの声が口ごもる。

「はつきり、言いなさいよ。それでなんで金を払うか屋敷に行くかなのよ？」

「……私の。私のためです」

「はっ？」

「私はファーストさんとある約束をしたんです。マリーダさんからお金を貰うか屋敷につれてくるか。そうすれば、私の願いを聞いてくれるって」

「事情は分かったわ。でも私には関係ないことよ。私があんたのために金を払う事もなし屋敷に行く事もなし。私にとって何か得になることがあるの？」

マリーダの言う通りで彼女に得なことは何もない。そう、これはマリーとファーストの問題なのである。しかしマリーダにどちらかの要求を呑んでもらわなければファーストに仕事を引き受けてもらえらなくなってしまう。

「私の家族はヴァンパイアに目の前に殺されました。私も辱めを受けました。私や家族をこんな目にしたヴァンパイアが憎いんです。だから復讐のためにファーストさんの力が必要なんです」

「そう。でもあんたみたいなのは、この街に腐るほど居るわ。さっきから、あんたの話聞いてると自分の復讐なのに人に頼りすぎなんじゃないの。ちょっとは自分でなんとかしたら？」

「……」

「あんた、やめたほうがいいわ。そんな中途半端な覚悟じゃ復讐なんて務まらないよ」

マリーダに突っ込まれ、反論できなくなるマリー。

「そんな事じゃ復讐なんて無理ね。仕事の邪魔だから帰っておくれ」

「……」

「早く出て行きなさいよ。でないと下の店番呼ぶわよ」

「……」

マリーは微動にしなかった。

そしてゆっくりと口を開く。

「私は、私の出来る所から始めます。それが、どうゆう結果を齎し、どう思われたとしても……」

マリーダが使ったペーパーナイフを奪いマリーダの喉元に押し当ててる。

「…あんだ、そんな事をしてタダで済むと思っているの」

「いいえ。タダで済むとは思っていません。マリーダさんおっしゃったじゃないですか。自分でなんとかしたらと。だから自分で出来る事からしてみます。マリーダさん選んで下さい。お金を払うか、屋敷に行くか」

「あいにく今、持ち合わせがない」

「では、一緒に屋敷まで行ってもらいます」

「やだと言ったら？」

「ファーストさんは連れてこいと言いましたが生死の有無は言ってませんでした」
「なるほど」

ペーパーナイフを持つマリーの手が小刻みに震えている。本人は分かってないようだ。

ただマリーダはその事に気付いていた。

「あー、もう。わかった。わかった。私の負けよ。出かける用意するから、その物騒なもんを下ろしなさい」

マリーダが降参の声を上げる。

「ホントですか？」

「ええ、だから早くナイフ下ろしなさい」

マリーはペーパーナイフを下ろしマリーダから離れた。ナイフが

ら解放されたマリィダは部屋の奥から、何やら屋敷に行くための準備を始めた。それからマリィは自分の手が震えている事によつやく気付いた。

「やっぱり、自分じゃ何も出来ないんだな」

マリィは小さな声で呟いた。

リュックを背負ったマリィダがマリィのところへやってくる。

「日が暮れないうちに、さっさと登るわよ」

そういうとマリィの手を引っ張って店を出る。

「あ、あの、ちょっと」

「あー、うるさい、うるさい」

そして二人は山を登った。

結局、山中で日は落ち蝋燭ランプを使うこととなったが、マリィダの案内で迷うことなく屋敷に着いた。

屋敷の扉前でパーソンが手を振る。

「暗くなっても帰ってこなかったから心配したよ」

「心配掛けてごめんなさい」

「ともあれ無事でなによりだよ。マリィダさんと一緒だったから大丈夫とは思っていたんだけどね」

「えっ？」

「あ、ああ。なんでもないよ。マリィダさんは何度も屋敷に来た事があるからね。ここの山道には慣れてるから」

「ああ、そうゆうことですか」

「マリィダさんもお疲れ様です。ご足労かけます」

「やあ、パーソン久しぶり。ファーストのアホは何処にいるだい？人を呼びつけておいて」

「はは、たしかにそうですね。まことに勝手なんですけど既に席にっています」

「ったく。無礼な男だよ。マリィ行くよ」

「え、どこにですか？」

「決まってるでしょ、食堂よ」

そう言う「ルー」の店を出たときのように手を引っ張られ食堂に移動した。

食堂には既にファーストが席についていた。マリーたちが食堂に入ってくる。

「よお、遅かったな。飯が冷えて凍っちまうところだったぜ」

「なに言ってるんだい。あんたがさっさとうちの店に来りゃ、済む事だろう」

ファーストの言葉にマリーダが突っ込む。とても金を取り立てる者を取り立てられる者の会話にはみえない。マリーダは空いてる席につく。パーソンに言われマリーも空いている席に付く。それからパーソンが食事を運んでくる。夜の晚餐が始まった。ファーストとマリーダは食事中に世間話を始めた。その様子を見てマリーは記憶を振り返る。

二人は知った仲のようで金銭トラブルを起こした様子にみえない。次にマリーダの店も豪華で、とてもお金に困っている様子はなかった。なのに、なぜ持ち合わせがないと言った。そもそもファーストは手紙を渡したときに、わざわざ手紙の内容を伝えたのか？手紙を読めば相手に十分伝わる。仮に持ち合わせがなかったとしても今の二人をみれば、いつでも支払いは可能と見える。それなのに屋敷に連れてくるというのも不自然である。

つまり考えられる結論は自分以外全員が演技をしていたという結論に至ったのである。

何故？ そう思った。思考を張り巡らす。皆目検討がつかない。むしろ、それより「ルー」の店での出来事が脳裏に思い出される。

『！』

マリーは大事な事を思い出す。それはマリーダにナイフを突きつけたことだ。

「マ、マリーダさん。ごめんなさい」

突然、マリーが謝る。皆がマリーを見る。

「え、な、何？」

「……演技だったんですよね。店でのこと」

「……そうだよ。まあ下手な演技だったから、すぐバレると思っただけ」

ばつの悪そうな顔でマリィダは言った。

「それなのに私ったら刃物を向けてしまいました。ごめんなさい」

「あー、そんなこと。気にしないでいいわよ。別に」

「いえ、でも」

ファーストがニヤつきながらマリィダを見てこう言う。

「マリィダに刃物を向けるとは大した野郎だ。殺されなくて良かったな。そいつダムピールだから、次は刃物向けるなよ」

「え！ そうなんですか？」

「まあね。でも別に言う事じゃないし」

「じゃあ、本気を出せばナイフなんて」

「もう済んだことだし、ご飯がまずくなるよ。ねっ、もうこの話はおしまい」

そういうとマリィダは食事を再開した。それに続きファーストも口に食事を運んだ。

マリィダは自分がなんだか恥ずかしくなった。マリィダはダムピールだった。ペーパーナイフなんて脅威でもなんでもなかった。結局マリィダはずっと気を使っていたのだ。それなのに自分は全く分かっていなかった。自分の欲のために人を巻き込もうとした。それなのにマリィダは何事もないように振舞ってくれた。

食事が終わり、一仕事終わったパーソンも席につく。

全員の着席を確認したファーストが口を開く。

「さて、約束どおりマリィ・フローベルは我々の提示した条件を達成した。今度は我々が約束を果たさなければならぬ」

ファーストの話に固唾を飲むマリィ。

「しかしタダと言う訳にいかない。それにすぐに敵討ちに出会えるとは限らない。そこでパーソンと話合っってマリィ・フローベルに

どうしてもらおうか考えた」

そうであった。約束では仕事を引き受けてはくれるといったが無償とは言ってなかった。マリーに不安がつる。ファーストがパーソンを見る。今度はパーソンが話し始める。

「ファーストの言うとおり、仕事として扱う以上、当然ながら報酬を頂かなければならない。話は変わるがこの屋敷は慢性的に家事全般に人員不足だ。そこで考えたのが雇用だ。だからマリーには明日からこの屋敷でメイドとして働いてもらうこととする。期限は敵討ちを倒すまで。どうかマリー？」

この提案はどう考えても、これはマリーのために考えられている。つまり、敵討ちが済むまで、この家に住んで良いという意味だ。メイドはあくまで、そのための理由に過ぎない。他人の自分がこの人たちにこんなに甘えていいのだろうか。マリーはそう思った。

「どうかかなにも、そんな甘えて……」

話の途中でファーストが話に入ってくる。

「勘違いするな。たまたま互いの利益が一致しただけだ」

もう、それ以上言わなくてもいい。そんなメッセージがファーストの言葉から感じ取られた。

「……ありがとうございます。ファーストさん」

「ファーストでいい。明日から俺もマリーと呼ぶ。いいな」

ファーストは壁のフックに掛けてあったハンター帽を取り深く被った。

「よかったわね。マリー」

「はい、マリーダさん」

「決まりだね。じゃあ明日から宜しくねマリー」

パーソンが話をまとめる。

「という訳だ、マリーダ。すまんが急ぎでメイド服の仕立てを頼む」
ファーストはマリーダに服の注文を頼む。そしてメロンほどの大きさの皮袋を二袋、マリーダに渡す。袋を開けるマリーダ。中にはクラウン金貨がぎっしりと詰まっていた。

「まいど、相変わらず太っ腹だね。服の大きさ決めるからマリーを借りるよ」

「あとは任せる」

そう言うつとファーストは食堂を出て自分の部屋に戻っていった。

「じゃ、マリー服のサイズを計るから、一緒について来て。パーソン、向こうの部屋借りるわよ」

「どうぞ」

マリーダはマリーを連れ、食堂を出て、すぐにある渡り廊下向かいの応接室へ行く。

部屋に入るとマリーダは背負ってきたリュックの中から巻尺と裁縫道具を取り出す。マリーはやっぱりと思う。普通、リュックの中にそのようなものは入ってない。段取りが良すぎる。

「あの、マリーダさんは最初から知っていたんですか？」

「え、ああ。薄々だけだね」

「手紙にはなんて書いてあったんです？」

「手紙を渡しに来た娘に服を仕立てようと思う。マリーダの目から仕立ててやってもいいと思ったら、娘と一緒に屋敷に来てくれ」

「それだけですか？」

「それだけ。あいつとは長い付き合いになるから何となくは分かっただけだね」

「そうなんですか。でも何でそんな事をマリーダさんに頼んだんでしょうか？」

「たぶん、あいつらは最初からマリーの頼みを聞いてやるつもりだったんだよ」

「えっ？」

「マリーみたいな境遇に遭った娘を何人も見たけど、結局は街で暮らしている。その方が楽だからね。高額な報酬を払ってまで復讐しなくても、ここで一から始めれば平穩に暮らせる。なんせこの街を襲撃するバカはヴァンパイアいないからね。それにブレスレットをしていても誰も白い目で見える奴も居ない。だから、あんたみたいにバカ正直な奴

が来たのは初めてだったんじゃないの」

「そうだったんですか」

「それにね。上級一族を相手にするには一国や街一つを全滅するぐらい大変なんだ。だからね。綺麗ごとじゃ済まされない。生き残った奴が報復する可能性もある。下手したら死ぬまで戦い続けなければならぬ。だから中途半端な気持ちじゃ、務まらないんだよ。だからマリー、あんたを試したんだと思う」

「闘い続ける覚悟があるか、をですか？」

「そう」

マリーに巻尺をあてながらマリーダは答えた。

「マリー、もう廻り始めちゃったら後に引き返せないよ。今なら間に合う。どうする？」

……

マリーダに聞いてヴァンパイアへの復讐がそんなに大変とは知らなかった。自分の甘さを再認識させられた。それが今のマリーの本心であった。だがマリーの気持ちは変わらなかった。もしここで復讐をやめてしまったら、自分自身に負けた気がした。そのまま平穩に暮らすのも悪くないだろう。でもそれは自分から生を否定しているように感じたのだ。

「もう私は一度、死んでいるんです。家族が殺され、ヴァンパイアに襲われた、あの日から。そして今日、私は生まれ変わったんです。そう一つの希望を手に入れたから。たとえそれが闇の中を突き進むことになっても、その希望は捨てたくない……」

「そう、分かったわ。もう私はなにも言わないよ。マリー、しっかり頑張るんだよ」

「はい」

マリーダはマリーの髪を撫でた。それはまるで実の姉が妹をあやす様にみえた。

一章？

1

マリーはVJの屋敷でメイドとして働いて1ヶ月が過ぎた。仕事にも、ようやく慣れはじめた頃だった。

マリーの1日は長い。朝、暗いうちから始まる。まず起きて、屋敷の西にある馬屋と家畜小屋を掃除し、馬や羊、鶏に餌を与える。それが終わると本館北一階のはなれのキッチンでファーストとパースンの食事を用意する。食事が終わると後片付けに入る。それからすぐに屋敷の掃除が始まる。

屋敷は広いため屋敷の部屋数は分からない。分からないというのはマリーが入室出来る部屋が限定されているためである。マリーの行けない部屋の掃除はパースンが行う。マリーの任された掃除場所は別館地下3階付きの台所、入浴場所、部屋は本館1階と2階のファーストの部屋とその隣部屋以外全部の計17部屋と中央階段となっている。そのため本館の東に隣接された塔には入ったことがない。高さは本館と変わらないが谷間の斜面に沿っているため地下3階からなる5階建ての塔である。本館の庭から覗いた事があるが危険なため、外からは近づけない。

掃除は昼過ぎまでかかる。昼は食事を取らない習慣となっている。そのためすぐ洗濯にとりかかる。それにしても今までよく1人でパースンはこれら全てをこなしてきたのかと感心してしまう。パースンやファーストの服は特注品が多いため、ほとんど業者に依頼している。パースンがキッチン場で炭式アイロンを服にあてる。マリーも何度が挑戦したが上手くいかず服を何度も焦がしている。パースンの仕事となった。洗濯した物は外にも干す事があるが、雪の降る今の季節は乾かない。

台所場は食事用の釜戸が2基、それから特大の特注暖炉がある。

木をくべる部分はレバーで開閉式となっている。なんでも高温の燃焼を確保する火室というものが付いてあるそうだ。これの上には金蔵製のタンクが付いてある。外の雪解け水を貯める貯水タンクと配管で連結されており、バルブをひねって金属のタンクに水を貯める。そして水は暖炉の火で温められ地下にある浴槽タンクに送られる。このお陰で、短時間で湯を沸かしバスやシャワーが利用できる。さらに労力も少ない。よく考えられた構造となっている。その特注暖炉の前から漏れ出した熱気で台所場は暖かい。そのため台所場に洗濯紐をたらし、服を乾かしている。

洗濯物が終わるとパーソンから馬車の扱いと護身術を習う。街でのトラブルに巻き込まれないためらしい。それが終わると夕食の準備に追われる。そして夕食が終わり、皆が順々にバスやシャワー、サウナを済ませるとマリーの番となる。それらが終わるとマリーは自由時間を手にするが仕事が終わると疲れてしまい、すぐに床に入ってしまう。これが月曜日から金曜日で続く。土曜日は街に降り、買い物と業者に出したクリーニングを取りに行くため、その日は掃除はない。買物にはパーソンが同行する。日曜日は休みとなっているが食事と風呂の準備はある。

これがマリーの日課であった。ちなみにファーストはというとほとんど屋敷にいない。いや居るのか居ないのかが謎で食事のときだけふらつと現れる。何をしているのか不思議に思うのだが毎日、仕事に忙しく、それどころではなかった。

夕食後、いつものように食器を洗っているとパーソンがやって来る。

「マリー、明日から4日ほど仕事の内容を変えるから」

「え？ はい。で、明日から何をすればいいんですか？」

「明日から人を招くから午後の仕事はしなくていい。その代わりに、明日から毎日、街に行つて人を迎えに行つてほしい」

「わかりました」

「じゃあ、そうゆうことで明日から頼むよ」

翌日の昼、マリーは人の迎えに行く事になった。昼食後、パーソンに表玄関の庭で待つように言われ、食後の片付けが終わると庭へ向う。

扉を開け庭に出ると、そこには一人の男が立っている。

身長3メートルはあるうか熊のような大男で肌の色はやや灰色がかっており、とても人に見えなかった。

……

一瞬、怖気づくマリー。

丁度そこにパーソンがやって来る。

「マリー、準備できたかい？」

「え、あ、はい。ところで……」

「ん？」

マリーは大男に視線を動かす。

「ああ、自己紹介がまだだったね」

「彼の名はストロングマン。屋敷の同僚さ。ビックリしたる？」

「はい、あまりにも大きな方なので。はじめましてマリー・フローベルです。この度、メイドとして働くことになりました。宜しくお願ひします。え、えっとストロングマンさん」

ストロングマンと呼ばれる大男が会釈する。

「街の人たちは彼が雪男ビククットのように見えることから、フットって愛称で呼んでいる。僕たちも街の人同様、彼をフットと呼んでいる。ね、そうたるフット」

パフットが頷く。パーソンは話を続ける。

「それとマリー。きみが山で倒れているのを彼が助けたんだ」

え？ 自分を助けた人物がこのストロングマンという男だったのか。意外に事実少し驚いた。最初にパーソンから同僚が助けたと聞いていたので、てっきりファーストだろうと思っていた。そうか、

同僚というのはストロングマンのことだったのか。ようやく命の恩人に会えた。

「そうでしたか。ストロングマンさんが私の命の恩人だったんですね。お礼が遅くなりすみませんでした。その節は助けてくださってありがとうございました」

またフットは頷いた。

「彼は仕事でずっと屋敷を留守にしていたんだ。マリイが屋敷を掃除している最中に帰って来たところなんだ」

なるほど、大きな屋敷にパーソンとファーストの2人にしては随分と広すぎると思っていたが、留守にしている人もいたのか。この屋敷にはマリイの知らない事が多い。

「それで一度も会わなかったんですね」

「そうだね。ところで昨日の話に戻るんだけど、今からマリイは街にフットと一緒に帰ってもらう。今まではフット一人で客人を迎えに行ってたんだが、今回からマリイも同行してもらうことにした。ついでに買物してもらおうと思う。フットは喋れないから買物が苦手なんだ。だからマリイと一緒に帰って彼を補佐して欲しい」

やはり彼は喋れなかったのか。

「わかりました。私は同行して買物をすればいいのですね？」

「そう。フットを見てびっくりする方も人も多いから」

「なるほど。あ、ごめんなさい。ストロングマンさん」

パーソンの言葉につい納得してしまうマリイ。たしかに初対面の人は驚くだろうなと思った。

ストロングマンはパーソンに顔を向ける。声は聞こえないが、2人はまるで会話しているように見える。パーソンが代弁して言う。

「マリイ、ストロングマンじゃなくてフットで呼べてさ」

会話をしていないのに。2人は意志疎通できるのか？

「フットさんと呼べばいいのですか？」

マリイはストロングマンを見る。するとストロングマンはマリイに向かって笑みをみせた。その笑みは不気味な大きな男の意外なお茶

目な一面を見せた。見た目の怖さとは裏腹に、その笑みはとても優しい印象をマリーは受けた。

「じゃあ自己紹介も終わった事だし、そろそろ迎えに行ってもらおうかな」

「わかりました。それではフットさん行きましょう」

マリーが歩き始めようとするがパーソンに肩を掴まれる。

「ちょっと待った。まだフットが準備できてないからちょっと待機だ」

マリーとパーソンはフットの準備が出来るまで庭で待つことになった。フットは馬屋の方へ行く。準備なのに何故、馬屋に？ マリーの頭の中に疑問符が湧き上がる。

それから5分ほどが経つ。

ザツザツ、ザツザツと雪を掻き分ける音が聞こえてくる。

その音はマリーたちの方へ近づいてくる。

マリーはフットの姿に驚嘆した。フットは巨大なものを背負っていた。それは鉄と木で出来た4人乗り馬車だった。ただし車輪は付いていないが。その荷台の上には木の板で出来た屋根があり、二人用のベンチが2つ中央に向き合っている。荷台に上るために小さな踏み板が作りつけられている。そして腰には重厚な革で出来たベルトをしており、左右から鉄の鎖が連なっている。その鎖の末端には巨大な除雪道具であるスノープウラの金属刃が2枚、ハの字状に合わさっている。それをフットは引いて来たのだ。スノープウラの幅は4メートルもあつた。そのため、フットの歩いた後ろには除雪され大きな道が出来上がる。

あっけに取られるマリー。

「マリー、乗って」

「え、何処です？もしかしてフットさんが背負っているあれ」にですか？」

フットの背負ったリュック型馬車を指差す。

「そう、あれ」

パーソンに急かされ、馬車の上に乗るマリー。
そしてマリーを乗せたフットはゆっくりと歩き出した。

3

街に降りる山中、ずっと無言だった。なにせフットは喋れないし、背中の馬車に乗っているためフットの反応を見ることが出来ない。仕方なくマリーは馬車から、後ろで除雪される山道を眺める。雪が積もっていたので分からなかったが、山道はかなり広さがあった。

街の入口に着くとフットは腰に巻いていたスノープウラを外すが馬車はそのままを背負って歩く。マリーは街に入ってからマリーは馬車を降り、自分の足で歩く。フットはマリーに手招きする。どうやら付いて来るように言っているらしい。フットの後をとことこ歩くマリー。30分ほど北西に歩き街の城砦近くまで歩く。街は王権制度でないため、もちろん城はない。しかし自衛のため重厚な城壁を備える。最北西の城壁近くに街の倉庫がひしめく。その一角から一本の通り道がある。そうやら、そこからしか通る事の出来ない通りのような道。そこから今度は真っ直ぐ東へ突き進む。すると直ぐに妖艶な看板の店が見える。どうやら風俗街のようで婦女らしき女性が通りのあちこちで通りに来た男に声を掛けている。

通りの突き当たり、他の店より大きな作りの店の前に着く。そこでフットは歩くのを止める。そしてマリーに向かって店の方を指差す。「店の中に客人がいるのですか？」

マリーが言うのと頷く。言われるまま店に入る。店には体格のいい男が立っていた。流石にフットまでにはいかないが、それでも十分に鍛えられている。

「どうしました？ お嬢さん。あいにく、ここは18歳以上じゃないと働けないよ」

男が言う。慌ててマリーは言う。

「ち、違います。あの客人を迎えにあがったのですが……」

「ん？」

男はマリーをじろじろ見る。そしてマリーの上着の襟首に付いた紋章を見ると店の外に出た。そしてすぐに帰ってきた。

「いや、悪かったね。ファーストさんとところの方だね。いや、それにしても驚いたよ。あんたみたいなお嬢さんが従事しているとは」「ニヤつきながら男が言う。その顔を察知しマリーは赤面し言い返す。

「その…あれではないです。屋敷でメイドを務めているマリーです」

「え、そうなのか。てっきり…新しい趣向かと思っただが」

「違います！」

さらにマリーの顔が赤くなる。

「悪い悪い」

男はマリーに謝るとカウンターベルを鳴らす。すると店の奥から2人の娼婦が現れる。「シエリー、ミゼル、仕事だ」

シエリーとミゼルと呼ばれた女性がマリーのところにやってくる。それから男にシエリーとミゼルを紹介される。

「それではお二人様、ご一緒に」

そういつてマリーは外へ促す。2人の娼婦はマリーに続き、店の外に出る。外でフットが待っていた。シエリーは一瞬だけ驚いたが、驚いたのはそれっきりだった。どうやらマリーが居たので、それほど驚かなかつたのだろう。フットは娼婦達に指で合図をする。二人を指差した後、自分の背中の馬車を指差す。どうやら乗れということらしい。マリーが二人を背中の馬車へ乗るように伝える。二人が馬車に乗り込む。それを確認するとまたマリーに指で説明を始める。まずフットが馬車の屋根に紐で巻きつけてある幌布を垂れ下ろす。そしてマリーに向って幌布の先についてある紐を指差す。マリーは紐を持つ。さらにフットの指説明は続く。馬車の底側面に金属で出来た輪を指差した。どうやら輪に紐を結べという事なのだろう。

「フットさん、紐を輪に結べばいいのですか？」

フットは頷く。マリーは言われた通りに紐を輪に通し結ぶ。する

と鉄と木でむき出しだった馬車の骨格は覆い隠され、中の様子見えないようになっていた。それを確認するとマリーに乘れと合図する。マリーも馬車に乗り込む。そしてフットが歩き始める。

「ミゼルよ。そしてこっちの子がシエリー」

ミゼルが改めて自己紹介する。シエリーも会釈する。

「マリー・フローベルです。マリーと呼んでください」

「よろしくマリー」

ミゼルが答える。

「それにしても驚きました。あの屋敷にあなたのようなメイドが居たなんて」

「いえ、私もメイドとして屋敷に仕えたのはひと月前からなんです」

「そうでしたか。それでマリーは夜のお努めもされているの？」

「いえ、違います。ただのメイドです」

慌てて答えるマリー。

「そうなんですか。私はてっきり……」

「てっきり？」

興味深々にマリーが答える。

「いえ、そのままの言葉です。あの方は若い子をご所望しますものですから」

たしかにミゼルたちもマリーとそう大差はない。たしか18歳以上とファーストが言っていたことを思い出す。それにしても先ほどからシエリーは喋らない。

「あの、シエリーさん、どこか気分が悪いのですか？」

するとミゼルが答える。

「いえ、この子初めてなので緊張しているのです」

「そうだったんですか。失礼しました」

マリーはシエリーに謝る。するとシエリーがマリーに向かって話す。

「いえ、すいません。なにぶん、屋敷へ行くのは初めてなものでして。それにお迎えの方も。前々からミゼルには聞いていたんですが実際にお会いになるとビックリしてしまいましたの。それに、なん

でも屋敷の殿方はとても激しいお方とお聞きしたもので、満足なさ
つて頂けるか、心配で」

「その心配は不要よシェリー。それよりも私たちが満足しすぎて先
に倒れないように」

話の内容はマリリーには強すぎたせいか耳まで赤くなる。話の話題
を変えなければとこつちが恥ずかしくなる。なんとか話題を変えよ
うと頭をひねるマリリー。

「ところでミゼルさんはフットさんを知っているご様子でしたが、
もう何度か屋敷には来られたのですか？」

「いえ、今回が2回目です。最初、フット様がお迎えにあがったと
きは驚きましたよ。誰も付き添いが居ませんでしたし、そのとき一
私 わたくし」1人でしたから。あの時はいきなり、フット様から
手紙を渡されて、それはもう今日のシェリーとは比べ物ならないほ
ど驚きました。でも実際に会ってみるととても優しい方を分かりま
したから」

「そうですよね」

話をしているとフットの足が止まる。

「あら、もう着いたのですか？」

ミゼルとシェリーが顔を見合わせる。

外の様子を見るマリリー。どうやら、いつも食材を調達する店の前だ
った。そういえば買物がまだだった。マリリーは急いでパーソンから
頼まれたものを買ひ、馬車に戻る。馬車の中で年端の変わらぬ少女
達はお喋りに夢中となった。それから1時間ほどして屋敷に戻った。
帰り道もフットは同じようにスノープウラを引いた。

4

屋敷に戻るとパーソンが食事の用意をして待っていた。ファース
ト、ミゼル、シェリーが先に食事を済ませ2階へ上がる。その後、
マリリーとパーソンが食事を始める。しかしフットの姿が見えない。

パーソンに尋ねる。

「あの、フットさんはどうしたんですか？」

「フットなら自分の部屋に戻ったよ」

「自分の部屋ですか？」

帰ってからフットを館内で見た記憶がない。いつの間に戻ったのだろうか？

「フットの部屋ははなれの塔にあるから。それにこの椅子やテーブルじゃフットに合わないだろ」

マリーには塔への入室は許可されていない。それで見なかったのかと納得した。それにこの部屋のテーブルも椅子もフットには小さすぎる。でも食事はどうする？

「フットさんはどこで食べるんですか？」

「彼は自分の部屋で食べるよ。もう僕が彼の部屋に運んだから心配しなくていいよ」

そうなのかと思う。それにしても1人で食事するのは寂しくないのかとマリーは思った。

「一緒に食べないんですか？」

「彼は1人で食べる方が好きなんだ。それが彼の希望だから」

「そうなんですか」

そう言つと2人は食事を続けた。食事が終わりいつものように片付けに入る。そして1日の仕事も終わり、ベッドに転がり夢の中へマリーは落ちた。

夜中、目が覚める。1階の便所へと部屋を出るとロビーを挟んだ向こうの部屋から細々と光が漏れている。ファーストの隣の部屋のようにだ。そういえば食事を終えてから3人は2階上がった。マリーの中で好奇心が芽生える。忍び足でロビーを渡り反対の部屋に行く。

そして、部屋の前で扉に耳をこすり付ける。部屋の中から女の吐息と喘ぐ声が聞こえる。マリーは手に汗をかいて耳に神経を研ぎ澄

ます。きしむベッドの音が聞こえる。甘い声が2つ。ミゼルとシェリーのようだ。先ほどから鍵穴から漏れる光に気が付く。ゆっくりと顔の位置をずらし鍵穴から中の様子をみる。部屋の中は薄暗いため、ぼやけて見える。徐々に目が慣れ始める。

ん？

マリーは自分の目を疑う。この屋敷には自分を合わせ女性は3人しか居ない。だから身体のシルエツトでミゼルとシェリーと判断できる。しかし相手をしている男のシルエツトがファーストにしては細い。

もしかして？

しっかりと瞳を広げ部屋の中を見る。

もしかしてだった。

相手はパーソンである。

え、えー！

心の中が騒いだ。

まさかであった。

1人でパニック陥っていると突然、後ろから口を押さえられた。

「むぐぐ」口を押さえられて声の出ないマリー。

「おっと。声を出しちゃいえねえよ、マリー嬢ちゃん。キヒヒイ」

小さな声が耳元でささやく。聞いたことのない声だった。しかし

声の主の言う通りで、ここで大声を上げると覗き見がばれてしまう。

マリーはおとなしく従う。

「よし、いい子だ。それじゃ、今から手を離すからゆっくりとこっ

ち向きな」

言われるがまま、ゆっくりと声の主の方へ身体の向きを変える。

目の前にはマリーと背丈の変わらぬ男が立っている。歳は30代くらいだろうか？ 男の顔には顔半分もある立派な鷹鼻しており、緑色の森の民が着る服で身を包んでいた。言っではなんだが、その容姿から盗賊の類にしか見えない。しかし自分の名を知っている以上、屋敷に縁のあるものと判断した。

男はずつと白い大きな歯を見せてニヤニヤしている。ひそひそ声でマリーに言う。

「マリー穰ちゃん、覗き見はいけねえさあ」

男に言われ首を縦に振るマリー。

「そうだろ。穰ちゃんは何も見なかったあ。そして今から部屋に戻って寝るう。そして起きたときにはあ『ああ、私。なんて変な夢をみたんだろ』って思うう。これイイだろお」

男はマリーに詰め寄って言う。マリーはまた首を縦に振る。

「そうだろ、そうだろ。だからマリー穰ちゃんは部屋に戻るこつたあ。キヒヒイ」

男に言われマリーは便所に行くことも忘れ部屋に戻った。部屋に戻る前にもう一度、振り返ったが、もう男の姿はなかった。

5

翌日、ファーストとパーソン。そしてマリーで朝食を取る。ミゼルとシェリーはまだ部屋で休んでいるとのことだった。昨日の出来事があったマリーはパーソンと会うとつい目をそらしてしまう。食事中、ファーストとパーソンの顔をちらちら見るマリー。昨日、先に2階へ上がったのはファースト、でも部屋で……居たのはパーソン。それにあの鷲鼻男。そうやってずっと考えては2人の顔をちらちら見る。

「さつきから何見てんだ。何か顔についてるのか？」

ファーストに怒鳴られる。

「いえ、すみません。なんでもないです」

パーソンも心配そうにマリーの方を見つめる。

「そうだよ。さつきから変だよ」

「ごめんなさいパーソン。なんでもないから。ご馳走様、私、食器洗いに行きます」

そう言うのと、その場から離れた。

ミゼルとシェリーが起きたのは昼過ぎであった。遅い朝食を取る。それから少しお茶を飲み一息ついて街へ帰る。もちろん街まで送る。「マリー、そろそろお二人を街まで送ってくれ」「パーソンに言われ「はい」と返事する。

「じゃあ、フットさんと呼んできませんようか?」

マリーはパーソンに尋ねる。

「いや、いい。それに今日はマリー一人で送ってもらうから」「え?」

「どうやって?」表情に出た。笑ってパーソンが言う。

「いや、フットみたいじゃなくて馬を使ってだよ。練習して、だいぶ立つからそろそろ実践をと思って」

「そうですか」

正直、あまり自信はないが仕事は仕事なのでしない訳にはいかない。

「それじゃ僕は2人の準備が出来たらお連れするから、先に庭に行っておいてくれ。今日は馬車の準備出来ている。明日からはマリー一人でやってね」

そう言われ庭に出るマリー。庭には2頭の馬が馬車に繋がっていた。大きさは昨日、フットが背負ったものより一回り小さい。フットはさらにあの金属の塊で出来たスノープウラを引いていた。彼が本来、なぜストロングマンと名乗っているのか理解した。

「それにしても、私ちゃんと馬車操れるのかしら。今から心配だわ」
1人ため息をつく。

「大丈夫だよ。マリーお嬢ちゃん。2頭とも賢くて優しいのを選んでるからよ。キヒヒ」

この声は!

手綱を引く台座から、鷲鼻男が現れる。

「あなたは、昨日の!」

「覚えてくれていたのお。マリーお嬢ちゃん」

「覚えるも何も昨日のことじゃないですか。一体、あなたは誰なんですか？」

そこまで言ったところでパーソン達がやって来る。パーソンが男に声をかける。

「スナイプ、準備は出来たかい？」

この男の名はスナイプの言うのか。スナイプと呼ばれた男がパーソンに手を振る。

「あら、スナイプ様、御機嫌よう。いつ街へお戻りになったんですか？」

「どうやらミゼルも知り合いらしい。」

「ミゼル様ちゃん久しぶりださあ。昨日の夜帰ってきたんだあ。キヒヒ」

そのやり取りを見ているマリーにパーソンが声をかける。

「マリー、彼はスナイプ。フットと同じく我々の仲間だ」

「改めてえ宜しく。マリーお嬢ちゃん。昨日はちゃんと名前言わなかったけどお」

スナイプがマリーに言う。

「昨日？」

パーソンがマリーを見る。

「いや、なんでもないんです。ねえ、スナイプさん」

スナイプの顔がニヤつく。スナイプもパーソンになんでもないと言う。そうなの？と不思議そうに首を傾げるパーソンだった。

急いでミゼルとシエリーを馬車に乗せ、手綱を握るマリー。急に手際が良くなる。そして出発する。

「それでは行って来ます」

「え、ああ。行ってらっしゃい」

パーソンが手を振る。パーソンの横でスナイプも手を振り見送る。

山道の途中、ようやく馬車の扱いに慣れてきたマリィ。ようやく後ろの二人に声をかける。

「ねえミゼル、ちょっと聞きたいんだけど？」

「なに？」

「あの、その……昨日の晩のことなんだけど。昨日のお相手は？」
言いづらかったが気になってしょうがなかった。

「もちろんファースト様でございますよ」

「えっ？　じゃあシェリーは？」

「私もミゼルと一緒にファースト様にご奉仕しました。あの、どうかしました？」

「あ、いや気にしないでなんでもないから」

そういうとマリィは手綱を握り締める。内心、相手がパーソンでなくて内心ホツとした。いや何を自分はいっているのだろう。別にパーソンが何をしようと自分には関係ないことなのに。

「そういえばミゼル、スナイプさんと知り合いみたいだけど。屋敷に行ったのは今回が2回目なんだよね？」

「ええ、マリィは知らないと思うけど、この街は男の人が持ち回りで城砦の護衛をしています。いつもファースト様のところからはスナイプ様が護衛に勤めています。なにせスナイプ様は弓の名手ですから」

「それに女子供に護身術を教えているのよ。だから街の女子供の間ではスナイプ様は信頼が厚いの」

珍しくシェリーも話に加わる。

「へえ、そうなんだ。知らなかった」

そうこうしているうちに店の前に着く。

「ありがとうマリィ」二人がマリィに言う。久しぶりの同世代の子と話せたマリィにも久方ぶりの楽しい時間だった。

「それじゃ、次の子を呼んでくるね」

シェリーが店に急いで戻る。

「次の子？」

「知らなかったのですの？ 女の子は4日間、入れ替わるの。私たちが行ったから、あと3日になるわ。だから明日もマリーに会えますわね」

うれしそうにミゼルが言った。4日間ってパーソンが言っていたことを思い出す。まさか4日間も……。マリーの顔が赤面する。そんなマリーの一初心 うぶ さを見てミゼルがくすくす笑う。そんなミゼルの様子に自分がとても幼く思えた。

ほどなくしてシェリーが2人の少女を連れてきた。
そして昨日と同じように屋敷へ少女を連れて行った。

7

あつという間に4日が過ぎた。普段の仕事に戻る。ただ違うのはファーストやフットが西の塔から何やら大きな道具を引っ張り出している点であった。

道具の準備だそうだ。そうヴァンパイアキラーとしての仕事のである。庭には特大の馬車が止まっている。まだ馬はつなげていない。そこへ次から次へ荷物を運ぶ2人。とくに巨大な荷物はフットでなければ運べないほどの大きさがある。出入りの許可がないマリーは掃除の合間をぬって、ちら見するが西の塔の様子は分からなかった。それから2日が経つ。庭には馬屋にいる8頭の馬、全てが繋がれている。しかしその場にいるのはファーストとパーソンしか居ない。そして馬車に乗っているのはファーストのみである。

「じゃあ、行って来る。マリー、屋敷のことは頼んだぞ」

「はい。でもパーソンは馬車に乗ってないみたいですが」

「パーソンは屋敷に居るが、パーソンにしか出来ない仕事をしてもらおう」

よく分からないが、パーソンも仕事に関わるらしい。

「わかりました」とマリーは応え、パーソンと共にファーストを送る。

ゆつくりと馬車が山を下りる。そして馬車が見えなくなった。

「そういえばフットさんやスナイプさんもいなかったんですが屋敷にいるんですか？」

「いや、2人は先に行ったんだ。向こうでファーストと落ち合うことになっている」

馬車で一緒に行けば面倒でないのと思ったが、これも作戦なのだろうとマリーは考える。屋敷に戻るパーソンに付いて行く。

2人だけの夕食が終わる。そしてパーソンが話始める。

「マリー、これから僕は仕事に入るため西の塔に3、4日も暮る。

もしかしたら早くなるかもしれないし、もっと長くなるかもしれない。だから屋敷の仕事は君に任せる。だからいつもより仕事量は減らしてもらえればいい」

「パーソンそれは分かったけど、食事とかは大丈夫なの？」

「ああ、心配しなくても干し肉やぶどう酒が塔の倉庫にあるから大丈夫だ」

塔の事は分からないのでパーソンのいう事を信じるしかない。それにしても塔にこもって何をするのだろうか？ 詮索は出来ない。

当面のマリーの仕事は主達の居ない屋敷を管理することだ。

「それでいつから塔に入るんです？」

「今から」

「今からですか？」

「うん、急で悪いんだけど、後のこと頼んだよ」

そういつてパーソンは衝動を出て廊下から塔の入口に入る。そして閉まった扉からガチャリと鍵の掛かった音がした。

そしてマリーはパーソンが出てくるまでの間、屋敷を守ると決意した。

扉にもたれるパーソン。

「うっ」とパーソンが唸る。

そして眼球が上転する。20秒ほどそれは続いた。上転して白目になっていた目に瞳が戻る。

「さて、ここからは私が指揮を取ろう。パーソンは皆に伝える。それが君だけの唯一の能力だから」

声の調子が変わった。身体も全体的に引き締まる。そして真っ暗な塔内を迷うことなく歩く。そして塔の最下層から続く地下室にある一室の部屋へ入る。一本の蠟燭に火をともし。部屋は薄暗く、その様子を表す。簡素な机と椅子。そして重厚な木で出来た棺桶があった。

「現地に着いたようだな。ファースト、指揮官準備が出来たら教えてくれ。事前にストロングマンとスナイプ矛に調査させてある。状況については2人に聞け。私はそろそろ眠る。眠ったら2人を起こせ。なにもないと思うが。何かあれば誰でもいい、箱棺桶に入れ。私の素体も一体操り人形馬車に積んである」

誰も居ない部屋でパーソンは呟くと棺桶の中に入った。

二章 ?

1

ブーン

空気が唸る。

肉片の飛び散る音がする。

骨の碎ける音がする。

ここはプレーメという村の辺りである。隣にあるサンナという村へ行く途中道で交戦が始まる。村は山岳麓に転々とある。

この地域はヴァアンパイアによって襲われた村人……いや食屍鬼シヨクシキことグール達によって占領されている。

グールはヴァアンパイアが人の生血を吸い尽くしたことによって生まれる人の肉を食べる怪物である。グールの容姿は生前と変わらなため判断しにくい、肌の色が不健康に白や灰の色をなしている。この雪山で素足や防寒対策がされてないという不自然な様子から判定は簡単であった。

現在ファースト、フット、スナイプがこれらと戦闘状態である。

近づいてくるグールを殴り散らすフット。彼の豪腕から繰り出される拳はグール達の頭蓋骨を潰し肉片と骨を吹き飛ばす。グールは頭部が心臓にとどめを刺さなければ、活動を止めない。

フットの拳は群がるグールを吹き飛ばす。運よく倒れた生き延びたグールはファーストによって踏みつけられ剣でとどめを刺される。遠くから近づいてくるグールの頭部にスナイプの放つクロスボウの矢が次々と打ち込まれていく。

「よつやく、片付いたさあ。それにしても、相当な数だあ。しかし、おいらは気になってしょうがない。なあファーストはこいつらどう思うう？」

「様子が変だ。支配されていない。たしかに数が多い。しかしこいつらは点でばらばらに動いている」

「でしょ」とスナイプ。そしてフットも頷く。

「考えられるのは」

「ヴァンパイア化だなあ」とスナイプがファーストの言葉につづく。
「ああ」

ヴァンパイア化、それはダムピールが死ぬときに起きる現象である。ダムピールは2度、生まれ変わる。最初はダムピールとして、そしてダムピールとしてその一生を終えるとヴァンパイアとして生まれ変わる。それは自我の崩壊を伴って。そのためダムピールがヴァンパイアになったことをはぐれ者と俗に言う。はぐれ者は著しい知力の低下の代わりに身体能力が何倍にも膨れ上がる。

今回、彼らの依頼はヴァンパイアとグールにされた村人の抹殺である。ヴァンパイアは戦闘においてグールを使うことは滅多にない。使うことはヴァンパイア世界において己の力がないということを経験に示してしまうため、ほとんどの場合グールを作ることはない。グールが現れる、それは二つの意味を成す。

ひとつはヴァンパイア自身が生命の危機に直面した際、そしてもうひとつはダムピールがヴァンパイア化し、手当たり次第に人を襲うときである。

ただ違う点は、グールに対して前者は命令を下す事が出来る点である。

先ほどまでの戦闘で倒したグール達に一過性の団体行動がない。

「依頼内容にずれがあるな」

「そうさなあ。まずは全滅したちゆう村に行かねえと話にならねーよおファースト」

「村に行つて見ないと結論は出せんということか」

「そゆこと」スナイプが再び歩き始めた。 2人も後に続く。

2

それは4日前に遡る。 プレーメ村の使いが仕事の依頼のためファーストに接触して来た。 内容は隣村のサンナでヴァンパイアが現れ、村を襲い次々と村人をグールに変えてしまったというのだ。

そしてグールは近隣の村々を次々と襲っている。 現在、グール達がプレーメ村に進んで来ているという。 ヴァンパイアの数ははつきり分らないが2体の可能性が高いと使いの者が言った。 ファースト達の仕事は村に巢食うヴァンパイアの抹殺とグールになった村人の処分であった。 内容からヴァンパイアハンターでも十分対応出来る内容であったが、村々の人口の3分の2がグールになっていると思われるため、複数のハンターを雇うことになる。 しかしほとんどのハンターは単独行動である。 己の自信、信念を持つため連携行動を苦手としている。 そのため多勢の依頼ではハンター同士の折り合いがつかない事しばしある。 そこでファースト達のような連携作戦を得意とするヴァンパイアキラーに依頼が舞い込んできたのだ。

「……………」

サンナ村に着いた3人は怪訝な表情を浮かべる。 村の建物は破壊され人っ子ひとりいない。 まさに死んだ村であった。

「こいつは酷い」

めずらしくスナイプがまじめな口調で喋る。

「まだ結論には早いが、恐らくヴァンパイアではない可能性が高いな」

ファーストの言葉に2人が頷く。

「こんな見境のない破壊の仕方はあ、どうみてもはぐれ者と思えよお」

「依頼では2体の可能性があると言っていた。 確認してみなければ

分からない」

そこまで言ったところで一瞬、ファーストの動きが止まった。

「臭うぞ」

スナイプがクロスボウを構える。フットは背後を見渡す。

小声でファーストがスナイプに囁く。

「人の臭いだ」

左奥の建物を指差す。

首を縦に振るスナイプ。身軽な動きで建物の背後へ回る。

ファーストとフットはじりじりと近づき間合いを詰める。

「動くな」

後頭部にスナイプがクロスボウを突きつける。

少年だった。歳は14、5歳に見える。

スナイプは少年の手を背中にまわし、家の壁に押し付ける。

「放せ」少年が声を立てる。

ファーストとフットがやって来る。

「ガキか。スナイプはなしてやれ」

自由になった少年がガツと後ろに飛びファースト達と間合いを取る。

そして睨む。

「お前たちも姉ちゃんを殺しに来た奴らだな」

「姉ちゃん？ 誰のことだ。坊主よお」

怪訝な顔でスナイプが答える。

「とぼけるな」

少年は1人で興奮している。どうやらお互いに話の接点がないようであった。ファーストは素早い手さばきで剣を少年の鼻の前に構える。

「わっ！」

少年は雪の積もった地面に尻餅をつく。

ファーストがゆっくりと少年に話しかける。

「おい、ガキ。俺たちは村からグールとその親元のヴァンパイアを

殺せと言われている。お前の言う姉ちゃんとはやらはヴァンパイアなのか？」

「姉ちゃんはヴァンパイアなんかじゃない！ ただ……」
「ただ？」

ファーストが少年に問う。しかし問う時間もなくファーストは「ふう」とため息をつき剣を構え直す。

「囲まれたなあ」

横目でスナイプがファーストに言う。

「ああ。なんて間の悪い連中だ。おいガキ、そこに隠れている。グール達のお出ました。まだお前に聞きたい事がある。喰われるんじゃないぞ」

ファースト達が武器を構え戦闘体勢に入った。

目視だけでも村の中に相当な数のグールが居る。たぶん外にも待機しているものもいるだろう。先ほどからグール達は止まっている。まるで命令を待っているかのよう。

「どうやら、こちらは依頼の得物が使っているグールのようだ」

「道の途中であったのとは違うなあ。統率されている。さて主はどこにいるのかねえ」

そう言っつてスナイプはきよるきよる辺りを見渡す。スナイプはさらに空を見上げた。空は雪の積もった大地のように白と薄い灰色で何もかも包み隠している。しかしスナイプの目は何かを捉えていた。

「上え！」

「飛行タイプ。ドラムロー族か」

「来るう」

スナイプが吠える。ファーストは握った剣をさらに強く握り直す。上空から大きな図体が急下降してくる。そして3人の前を横切った。その後、また上昇し再び急降下してきた。威嚇であった。大きな図体が振り子のように繰り返してくる。3人は威嚇によって身動きが照れない。その間にグール達が間合いを詰めてくる。

「でかいくせに、ちょこまかとうつとしい野郎だ」

ファーストが苛立つ。スナイプは大きな凶体に目を追いながら喋る。

「やっかいな野郎だあ。動きに目が慣れてきた。ファースト落とすぞお」

「わかったスナイプ。あとは任せる。指示をよこせ」

「んじゃ。次、降りてきたら少し左に奴を動かしてくれえ」

スナイプはフットの背中の後ろで構える。

「フット、盾になつてえ」

頷くと岩のようにその場に踏ん張りガードを固める。フットのすぐ右横でファーストが剣を上段突きの構えになる。

ギューン

風を切る音と共に大きな凶体がフットめがけて急下降してくる。しかしフットは動かない。

さら加速する凶体はうなりをあげる。

微動だにしないフット。

互いの距離が徐々に近くなる。

10メートル

5メートル

3、2、1

強固な盾となったフット。その横で剣を構えるファースト。

もうすぐゼロメートルに差し掛かった。

ギューンと左に急旋回しようとする巨体。

大きな凶体は己の恐怖心に負けた。避けようと左に反れたが判断が遅かったためフットの横をかすめバランスを崩す。連射式のカートリッジに交換したクロスボウを後方から撃つスナイプ。集中砲火によって左の翼をに風穴を開けられた大きな凶体の主。

ズッドオオオオー

巨体が地面の雪中にめり込んでいく。

そして瓦礫に突っ込み静止する。

雪煙が辺りを舞う。

その中から巨体を姿を露にした。

二章 ？

3

地面に落ちた巨体、それは大蝙蝠であった。体長は2メートルほどであろうか。

翼を広げれば10メートルはあるように見える。

そして成人男性の腕ほどもある鉤爪が不気味に光る。

「ようやく落ちたか」

「あんま手を叩いて喜べねえがなあ」

すでにファースト達の周りには詰め寄ったグール達で囲まれている。その数およそ200体。

「なに、雑魚が何体いようが恐るに足らん」

ファーストはスナイプの腰に収まっていた短剣を抜く。

右手に剣、左手に短剣をもつと両手を広げる。

その場で足に力を入れる。

ファーストはその場でゆっくり回転し始める。

それは徐々に速度を増していく。

回転はどんどん高速になる。

まるで小さな竜巻のように。

小さな竜巻となったファーストはグールの集団に突っ込んでいく。

竜巻が通るとグールの肉片と血が混ざり、白い雪のキャンパスの

上に紅の様子がほとばしる。

グール全滅にわずか20秒。

目標をなくした竜巻は徐々に動きを緩め本来の姿に戻っていく。

「終わったぞ。これで思う存分、手を叩ける」

ハイハイとスナイプが手を叩く。

大蝙蝠がようやく体を立て直す。しかし翼をやらね、上手く立つ事が出来ない。

「おい、ドラム口野郎。変身を解いたらどうだ？」
ファーストが大蝙蝠に言い放つ。
「ほお、俺の一族を知っているとは」大蝙蝠が喋る。
そして大蝙蝠の姿が徐々に変化し男の形へと変化する。
「村の人間を次々にグール変えている下品野郎ってのはお前か？」
すると男が答える。
「貴様は何者だ？ あの女の仲間か？」
「あの女？」
そう言えば先の少年も同じ事を言っていた。女とは一体？
ファーストの反応を見て男が答えた。
「どうやら違うようだな。俺を殺しに来たのか？」
「そうなるな。お前以外にもいるらしいがな」
「そうか。それで、そのもう俺以外の奴には遭ったのか？」
男は不気味な笑みをこぼす。
「お前に答える義務はない」
剣を構えるファースト。
「おっと、俺はお前たちとここで戦う気はない」
「往生際が悪い野郎だ」
「いいや。貴様達に譲ってやってるんだよ」
「？」
「なにか聞こえないか？」
男が口元到人差し指をあて、耳を澄ますように合図を送ってくる。
ファーストは男の指示に従い耳を研ぎ澄ます。スナイプ、フット
もそれに続く。
ギューン ギューン
大枝の撓る音が遠くから聞こえる。
「お出ましたぞ。俺の兵隊を皆殺しにした責任は取ってもらおうぞ」
男は大蝙蝠に変化すると、すぐさま、その場から飛び去った。

遠目から巨大な雪柱が見える。

村の西方に出現した雪柱は転々と発生する。

徐々にこちらに近づいてくる。

そして3人の近くでギューンンという強い音が近づいた。

スナイプが叫ぶ。

「フット！」

上空の灰色がかった雲。

その景色の中から何かが高速で近づく。

フットが咄嗟に拳を繰り出す。その間にフットの背後へファーストとスナイプが避難する。

巨体であるフットの体が5cmほど地面をめり込みながら後退した。

女だった。

信じられない力でフットの拳に女の手刀が突き刺さっていた。

どうやらヴァンパイアの男と少年が言う女のようだ。

整った鼻筋にアクセントとなっている赤毛。

しかしその瞳に宿るいろは血の様に赤々と輝く。

赤の瞳、それはダムピールが死んでヴァンパイア化した特長である。

「どうやら、こいつで間違いないようだなあ」

「ああ。それにしてもフットが動くとは、どおりであの腰抜け野郎ヴァンパイアが警戒するわけだ。」

「どうする？ 依頼ではヴァンパイアのはずなんだけどお。とりあえず捕まえるかあ？」

「スナイプ、こんな状況で冗談言えるのか？ どうみてもそんな余裕はない。出来れば金にらん事は首を突っ込みたくないんだが…」

…

「……だなあ」

そう2人は言うつとフットの背中から一気に飛び出し応戦する。

ファーストが剣を振る。女は爪でそれらを受ける。その隙にスナイプが矢を打ち込む。

女は後方に飛びスルリとかわす。

しかしスナイプもそれに対応し着地予測点にすぐさま矢を打ち込む。

さらに女は大きく飛躍しそれらを避ける。

「予想以上に動くう」

「スナイプ」

ファーストは剣の刃をスナイプに向け見せる。

剣の刃は刃こぼれが酷く、武器としての機能をほぼ失っている。

「あんだだけグール狩った後に、あんな姉ちゃんやからそうなるんさあ」

苦々しく首を縦に振るファースト。

お手上げといった感じで両手広げるスナイプ。

「長引けば、こちらが不利になる」

ファーストが短期決戦の意思表示をする。既に選択の余地は残されていない。

スナイプは黙ってクロスボウに連発式のカートリッジを充填する。装填し終わると、ふうと一息つく。そして2人に指示を飛ばす。

「もう矢がない。悪いがあ、困らなってくれえ」

意図を汲み取ったファーストとフットは頷く。

ここでケリをつける。

ファースト、フットが同時に女めがけて突っ込んでいく。

フットが連続で拳を繰り出す。

ファーストは村の家の外に放置されていた斧を拾い剣と斧を振り回す。

動きは滅茶苦茶であった。作戦とは思えぬ素人のような動き。ただ繰り出す攻撃回数が異常なほど多い。

ヴァンパイア化で知能が低下した女は同時攻撃によってスナイプへの注意が散漫になる。

そのチャンスのスナイプは見逃さなかった。
女が2人の攻撃を避けるため後方に飛んだ。
女に隙が生まれた。
スナイプが女の胸に標準を捕らえ矢を打ち込んだ。
風を突き破って唸る矢。

!!!

グツシュと鈍い音がした。
女の右肩に矢が刺さっていた。
しかし致命傷に至っていない。
的が外れている。振り返るファーストとフット。
スナイプの体制が崩れている。

その横に先ほどまで建物の中に隠れていた少年の姿があった。

「姉ちゃん、逃げて！」

大声で少年が女に向かって叫ぶ。

一瞬、女の動きが止まる。

しかし女は再び活動を始める。

そして今度は少年とスナイプのいる方向へ猛スピードで接近する。

「逃げる！」

ファーストが怒鳴る。

女は少年の前で突きの構えになる。

「わっ！」

少年は驚き尻餅をつく。

女と少年の目が合う。

また女の動きが一瞬止まる。

ブフォーブフォー！

ファーストの投げた斧が重い音をたてる。

ブーメランのように回りながら。

それは女に吸い込まれるように突っ込んでくる。

しかし女は大きく跳躍し、それを避ける。

スナイプたちのところへ駆け寄ったファーストとフット。

……

数秒間の沈黙が過ぎる。

しかし女は戦闘を続けなかった。

そのまま瓦礫に飛び移りながら、森の中へと消えた。

二章 ?

5

少年の前へ近づくファースト。

いきなり少年をぶん殴る。少年は衝撃で雪の中に倒れ転げる。

「貴様、殺されたいのか？ 危うく全滅になるところだっただろうが」

殴られた衝撃で口元を切ったのか血が流れる。

「…ちゃんはそんなことしねえ」

「ああ？」

「姉ちゃんはそんなことしねえ。お前らハンターが姉ちゃんを殺そうとするからだ」

「お前が生前、女と知り合いみいだが、俺たちに言わせれば無差別に襲う化け物だ」

「そんなことない！」

少年が怒鳴る。

ファーストが次の言葉を発するがフットよって遮られる。代わりにスナイプが会話の輪に入った。

「はいはい。話が終わりそうにないので、ここでストップう。助かったんだし、結果オーライでいいじゃない？ ねっ大将」

「ちいっ」と口を鳴らすファースト。

代わってスナイプが少年に話す。しかしその表情に普段の笑みはない。

「坊や。結果的に良かったが、大将の言うとおり一步間違えば、全員あの世に行っていた。次からは邪魔すんじゃないぞ。今回は大将がお前さんを殴ったから勘弁してやるが、また邪魔したら迷わずにお前さんを殺す。いいな」

がらりと雰囲気の変わったスナイプの言動は少年の心を貫く。

少年は生唾を飲んで首を縦に振った。

「さてと」スナイプはいつもの調子に戻る。

「まだ自己紹介がまだだったさあ。おいらはスナイプ、あつちのでつかいのはフット。それでさっき殴った大将がファースト。で、おたくの名はあ？」

「……トミー」

「トミー、おいら達は村の依頼でここに来たんだあ。村の話ではヴァンパイアとそのグール達の始末と言われて来たんだが何か知らないかあ？ 村の話ではヴァンパイアはと聞いていたんだがあ、なんだか村の話と違う気がするんだあ。もしかしたらまだ、おいら達が遭遇してないだけなのかもしれないのかなあ」

……

トミーと名乗る少年が口を開く。

「……あなた達も他のハンター達みたいに姉ちゃんを殺しにに来たりんじゃないんですか？」

「ほかにハンターがいるのか？」

ファーストが尋ねる。

トミーはこくりと頷く。

ファースト達は顔を見合わせる。

「おい、トミーとやら。俺たちは村から一切、そんな情報は聞いていない。ハンターがいるとは初耳だ」

そしてファーストはトミーにこれまでの経緯を話した。村を襲うヴァンパイアと次々にグールにされ村人の殲滅の依頼を受けた事。サンナ村に行く途中で統率されていないグールを発見し戦闘になったこと。村に着いて破壊された村を見たこと。村の話と状況が違うことに疑問を抱き始めた事。そして戦闘と村の状況からはぐれ者の存在を疑い始めた事。その存在を確認するため村を調査しようとした矢先トミーを発見したこと。その後はトミーも見たとおりの戦闘に陥った事。

淡々と状況を説明するファースト。

トミーは黙ってファーストの話聞いた。

「そうだったんですか。勘違いしていませんでした」

「それでトミー。実際にこの村で何があった？ お前の言う姉ちゃんは何故はぐれ者になった？ そして別のハンターとは？ 知っていることで構わない。教えてくれないか？」

「わかりました。でもその前に約束してくれませんか？ いきなり姉ちゃんを殺さないでください。出来たら捕まえて欲しい。そして話してみたい姉ちゃんと」

ファーストは険しい顔になる。

「正直、むずかしい。彼女はすでにヴァンパイア化している。捕まえるということは殺す以上に危険なんだ。今の我々で彼女を取り押さえられる保障はできない。残念だが、その希望をかなえてやることは俺たちには出来ないと思ってくれ。しいてしてやれることは、これ以上、彼女が罪を犯さないようにしてやる事しか出来ない。すまん」

……

「やはり、そうでしたか。何となくは気付いていました。本当のことを言ってくれてありがとうございます……僕も決心がつかしました。姉ちゃんのために何かしてやりたい。だから協力してもらえませんか」

「出来る範囲で」

ファーストが答える。スナイプ、フットも頷く。

「それでは僕の知っている事をお話します」

6

ファースト達が依頼を受ける2週間前に話はさかのぼる。

プリーメ村とその周囲の村を縄張とするヴァンパイア一族のドラマ

口家は下級階級の貴族吸血鬼である。

ヴァンパイア達は階級があり、それに伴って吸血する動物が決まっている。

階級は上級階級貴族、下級階級貴族、無階級で構成されている。人間の血は美食とされ上級階級以外は口に出来ないという掟がある。

そのため下級貴族であるドラム口家は牛や豚の血を吸うことしか許されていない。

ちなみに無階級は通常、民と呼ばれ、鼠などの小動物の血しか食すことを許されていない。

彼らは10年に一度、上級階級の貴族へ献上するための人間を捕まえるが、数は1人か2人と決まっている。なぜなら上級階級者はその人間の選別で下級貴族の品位を見定めているからである。大量に連れて行ったところで物の価値が分からないというレットルを貼られ自分の地位を下げてしまう恐れがあるためだ。

そして村もほんの数人、生贄をささげる事で治安が維持されるため、お互いこれまでトラブルはなかった。

それに生贄とはいえ殺されることはなく、5、6年もすれば無事に帰ってくるのだ。これは現在のヴァンパイアの長であるヴェクタ1王が約200年前に取り決めた。

それから、この200年ヴァンパイアが村を襲うということとはなくなつた。

二章 ? (後書き)

次回から三章へ移ります。現在、製作中です。どう表現するのが合っているのかわかりませんが、寝かしてみる?と言っただけでしょうか。興奮から冷め自分の作品を見つめ直すといった感じですか。また投稿期間にひらきが出ると思いますが宜しくお願いします。

三章 ？

今年も10年目の冬がプレーメ村にやってきた。
それは人選の儀。

村々を支配下においた地方の下流貴族ヴァンパイアが上流貴族へ吸血用の人間を献上する制度である。

この制度はまだ200年前に出来た新しいものある。これにより上級貴族は下級貴族の評価する指標のひとつになっている。これ以外にも様々な指標する要素があるのだが、ある程度の評価を得られなかった下級貴族は準上級貴族の仲間入りが出来る。そのため下級貴族はこぞって指標になる制度に力をいれた。

山岳の麓に転々と集落がある。それらの村をまとめるのがプレーメ村の役割である。プレーメ以外にサンナ、ラナ、ピアリ、ココという村が点在している。

今回、人選に派遣されたヴァンパイアはデル・ドラム口。30歳とヴァンパイアとしては非常に若い。人で言うならば10歳程度といったものだろう。

通常、人選には100歳を過ぎた成人として扱われるヴァンパイアが任されるのであるが、今回は違った。

風の噂であるがデルはドラム口一族の直系の子供で、若くして周りのヴァンパイアを凌ぐ力を頭角した。しかし、それはデル自身を慢心させる結果となってしまうた。同族のヴァンパイアと頻繁に衝突するようになり、とうとう同族の1人を手に掛けてしまった。本来、同族殺しはタブーとされているが、直系の息子であるデルを可愛がる親は彼に人選を任せることで免罪にしようとしたのだ。

こうしてデル・ドラム口はプレーメの村にやって来た。

しかし、それは最悪の状況を生む序章の始まりであった。

三章 ？

2

いつも穏やかなプレーメ村が朝から忙しく落ち着かない。

明日は人選の儀のためヴァンパイアが村にやってくる。

10年に一度、村に伝わる習慣。

しかし今回はいつもと違った。

それは訪れるヴァンパイアがこれまでと違うからだ。

デル・ドラムロ。

ドラムロ一族の長、ヴィレット・ドラムロの子息である。

年齢は若干30歳と若い。

そして今まで村には、直系のものが人選に来た事はない。

プレーメ村では各村の村長達が集り臨時会議を行っていた。

「さて、明日はいよいよ人選に噂のご子息が来るわけじゃが、問題

はあのデル・ドラムロ公が来るという事じゃ」

プレーメの村長が言った。

あちこちで、ため息が漏れる。

「なんでも同族でいざこざを起こしたそうではないか。今回の人選、
まともにするのか心配だ」

村長の誰かが言った。その意見に他の村長も頷く。

「しかも厄介な事はヴィレット・ドラムロの子息であることだ。ト
ラブルが村で起こったとして本家が我々の話をまともに取り合っ
てくれるとはとても思えない」

「そうだ、そうだ」と村々の代表者たちは拳って言う。

「静粛に」

プレーメの村長の一声でその場が静まる。

「みなが言つとおりじゃ。しかしまだ問題を起こしたわけではない」
各々が話に耳を傾ける。

「……問題は、事が起きたときじゃ。起きてもないのに不用意に警戒すれば反感を買う」

「たしかに」

別の村長が言う。他の者も意見に賛同する。

「……わしはある事を思い出した」

プレーメの村長に視線が注目する。

「ハンターじゃ。しかも村出身のな」

ピアリの村長がハツと気付く。

「たしか、ラナの村にいる……たしか」

ラナ村の村長が答える。

「エレノアのことですな」

「おお、そうじゃ、そんな名前じゃ」

誰かが言った。

「なるほど、彼女は元ハンターですからな」

ラナ村の村長が納得したように言う。

「それに連中も知らぬ。仮に何かあっても言い訳が通りますな」

ピアリ村の村長がプレーメ村の村長の意図を答えた。

「なるほど」と村々の村長が頷く。

「それで誰が彼女に交渉するのですか？」

ピアリ村の村長が質問した。

皆がざわつき始める。しかしそれも直ぐに収まる。

「わしが行こう」

プレーメ村の村長が言った。村々の代表者である彼に反対する者はいなかった。

エレノア・クリステイン。今から3年前、ピアリ村の近くで倒れていたところを村人が発見し保護された女性であった。それ以来、村から離れた森の中でひっそりと暮らしている。なぜなら彼女はダムピールだったからだ。当初は彼女の体力が戻った時点で村を出て行ってもらう予定であった。ダムピールが村に居る事に村人のほとんどが快く思っていなかった。それが現状である。

しかし、ある出来事によって彼女は村のはずれではあるが定住するを許された。彼女の体力が回復し、村を出る日が近づいたそんなとき、村にある事件が起こった。それは野良鬼難民ヴァンパイアの出現だった。

野良鬼、それは民の階級であるヴァンパイアが居場所を無くし難民となり、次々と貴族の領土に侵入する現象である。そして血に飢えた彼らは手当たり次第に人や家畜を襲う。

民と言う階級、それはある種、人よりも残酷な運命かもしれない。ヴァンパイアの世界は階級制度である。上流貴族の下につく下部が下流貴族にあたる。そしてさらに下流階級の下につくのが民である。しかし民の扱いは奴隷である。彼らには休息も安堵もない。貴族達にとって道具でしかない彼らは、人よりも扱いは酷い。

人の血はヴァンパイアにとって特別なものである。その血はヴァンパイアに強い力と生命力をみなぎる。そのため人はヴァンパイアにとって貴重な家畜なのである。そのお陰で人間はある種の檻に似た環境によって守られている。しかし民には、そのような保障は一切ない。

彼らはヴァンパイアでありながら人よりも惨めな暮らしを強いられている。

その劣悪な環境から逃げ出した難民の存在を人々は野良鬼と言った。

そして3年前、野良鬼の集団がプレーメ村になだれ込み、人や家畜を次々と襲った。

しかしそれはすぐに沈静化する。

エレノア・クリスティンである。

当時、ハンターであった彼女の活躍によって野良鬼の集団は全滅した。

こうして村を救った彼女は村人達に受け容れられた。

それから彼女はハンター稼業を引退し、ラナ村でひっそりと暮らすようになった。

三章 ?

3

プレーメ村周囲に点在する村々。その中でもっとも外れにあるのがラナ村。ここは村人がほとんど住んでいない森林深い場所。そこに一人のダムピールの女性が住んでいる。

名はエレノア・クリスティン。

彼女は元ハンターであるが、あるきっかけで3年ほど前からこの村に住むようになった。エレノアはダムピールである。そのため彼女は人間の成人男性より遥かに力がある。

その身体能力を活かし森林で伐採を営む樵をしながら暮らしている。

いつものようにエレノアは森に向かい斧を使って木を倒す。そして家の前に木の丸太を引きずって持ち帰る。

家に帰ると普段、人っひとり訪れない家の前に珍しい客人が待っていた。

客人はプレーメの村長だた。

「プレーメ村の村長ではないですか。こんな森深くにわざわざ。なにか御用ですか?」

「ああ、そうなんじゃ。エレノア」

「それなら、こちらから伺いましたのに」

「いや、ちよつとな。個人的なことなんじゃ」

神妙な顔の村長で話す。

「立ち話もなんですし、どうぞ中へ」エレノアが村長を家に招く。暖かいスープを「どうぞ」と差し出す。

「ああ、すまんのう」村長は温かいスープを飲んで一息つく。

……

「ところで村長、お話と言うのは?」

村長はカップをテーブルに置く。

「もうすぐ、人選の時期が来る」

「聞いております。私はこの村に来て日が浅いので実際に見たことはないですが」

「この村々の人選はずっと決まったヴァンパイアが担当しておった。掟に忠実で村の人間とも上手くやっていた。……しかし今回の人選には別の使いが来る。名はデル・ドラム口。この地域を治めるドラム口家の直系の血筋の出じゃ」

エレノアも一口スープを飲んでから質問する。

「人選について、詳しく知りませんが、一族の直系の出が直接来るというのは聞いた事がありませんね」

俯き加減に村長は話を続ける。

「デル・ドラム口という男は一族の中でも問題になっているらしいのじゃ。なんでも一族のものを手に掛けたとか」

「それでは村長、デルと言う男、掟破りなのでは？」

掟破りとは一族同士および他族のヴァンパイアと交戦してはならないというものだ。

掟を破った者には本来、厳しい処分が下される。

「そうじゃ、掟破りじゃ。しかしデルはヴィレッド公のとして唯一の肉親。可愛くて仕方ないんじゃないやろう。人選の地位を与え、さらに内と上の目から遠ざけたのであろう」

「つまりカモフラージュ」

村長は静かに頷く。

「そんな者がまともに人選をするとは思えんのだ。掟破りと分かっている。ハンターを呼んでも問題はない。しかし相手はドラム口家の子息。公にすれば村もただでは済まんじゃろ」

エレノアは村長が言う前に自ら発した。

「つまり、私にハンターとしてドラム口の子息を」

こくつと村長は頷く。

「しかし私はもうハンターではないです。それに以前のように動け

るかどうか……」

「3年前、おぬしは野良鬼どもを1人で全滅させたほどの腕じゃ。ブランクがあつたとしても、そこらの名の知れぬハンターよりよっぽど頼りになる」

「……しかし」

「頼む。村を救うと思って力をかしてくれんじやろうか。それにいきなり戦えといっている訳ではない。相手の様子をさぐってほしいんじゃ。もしなにもなければ何も無い。ただ村として安全対策をしっかりとりたいだけなんじゃ」

村長はエレノアに頭を下げる。

「ちよつと待つてください」と村長に頭を上げるように言うエレノア。

しかし村長は頭を上げなかった。

「わかりましたから村長、頭をお上げください」

村長の熱意にエレノアは折れた。それに村に住ましてもらっている恩もある。

「おお、それじゃあ」

「はい、引き受けます。ただし戦闘は最後の最後です」

「ああ、もちろんじゃ。出来れば戦闘にならんことを願っておる」

「私も同感です」

三章 ？

4

1人の女性と1人の少年が道を歩いていていた。

「姉ちゃん、なんで引き受けたんだよ」少年は言う。

「しょうがないじゃない。村に住まわせてもらっているんだし」

「また、そうやって。3年前、村を救ったのは姉ちゃんなんだ。堂々としていればいいんだ。それなのに今度は村の頼みで、また戦うなんて」

「」

「」

「今回は戦いじゃないのよ。あくまで偵察なんだからね。それとトミー危ないから着いてこないで」

「偵察なんだろ。じゃあ着いて行っても問題ないだろ。それとも、それほど危ないのか？」

「…もう知らない」

黙ってエレノアは歩く。後ろからトミーもとぼとぼと着いて行く。

昨日、現れた新たな人選者ことデル・ドラム口は村々から1人ずつ年頃の娘を連れて行った。

「俺ははじめてのことだからぬことが多から村から1人ずつ連れて行く。なに心配には及ばん。候補に選ばれなかった者は村へ還す」

それからすでに3日が経過した。村長たちやエレノアが監視するよりもデルの動きが早く、そして予想外の動きだったため様子を見ることにしたのだが、まだ村には誰も戻っていない。そして村の中で一番はなれた位置にあるココ村。そこにある人選のための館が存在する。今、エレノア達はそこへ向かっている最中である。

「ねえ、トミー本当にそろそろ村に戻って。お願い」

「いやだよ。姉ちゃんを手伝う」

はあと肩を落とすエレノア。

「村に入ったらトミーは待機しておいてね。絶対よ。着いてきたら、もう口聞かないから」

「ちっ、分かったよ。村で待っている。やばくなったら逃げるんだぜ」

「分かってる。私も戦いに来たわけじゃないから」

そういう話をするうちにココ村に2人は着いた。

そして1人、屋敷に向うエレノアをトミーは見送った。

三章 ？

5

屋敷の近くに生い茂る木々の上にひっそりと身を隠したエレノア。

屋敷内は暗い。普通の人間なら目視できない室内をエレノアの目ははつきり捉えていた。屋敷内に大きな檻がある。その中に数名の女性がいた。デルに攫われた村の娘である。その外にも村の娘が2人いる。

様子が変だ。2人の娘が檻の周囲をぐるぐると行き来している。

エレノアは気付いた。その2人が人間ではなくなっている事に。「やはり錠を破ったか。それにしてもたちが悪い。2人もグールにして。完全に血に溺れたか」

エレノアは村の娘を救出する作戦を考える。下手に行けば囚われた娘たちも襲われる。

辛抱強く観察を続け、デルの動きを観察する事にした。

3時間ほど木で待機しているとデルが部屋の中に入るのが見えた。そして檻の中の娘の首筋に牙を突きつける。それが終わると部屋から出て行く。幸い吸われた女性は檻の中のままだ。完全に吸い尽くされてはいないようだ。

デルの行動を把握するため、再び木と一体化するエレノア。

「それにしても厄介だわ。あんなに血を貪っている。どれだけの力を宿しているのかしら」

ヴァンパイアは人の血を吸う事で生命力を増幅する。それは能力全体を向上させることに繋がる。人の血はヴァンパイアにとって魅惑の魔法なのである。それが原因でヴァンパイア同士の競争もずっと続いていた。だから人の血は嚴重に扱われるようになったのだ。

しかし、今回の若きヴァンパイアはその秩序が理解できていない

らしい。本能のままに動いている。ある種、本来のヴァンパイアと言っべきだろうか。だがそのような者は排除せねばならぬ。エレノアは最悪の事態も想定しながら観察を続けた。観察は3日目となった。

観察の結果、デルは決まった時間に、吸血し、それ以外はほとんど屋敷の奥で寝ている。ときおり外に半日ほど出ては戻ってくる。エレノアはこの3日間に計画を立てた。まず人質の救出である。総合的判断で全員を1度に救出することにした。人数を分ければ警戒され、余計に救出困難となる。それに戦闘の際、人質が居ては不利になる。デルの行動から戦闘は避けられないと判断した。そして、その時がきた。デルが外に出た。彼が外出すれば半日は戻らない。

デルが消えたのを確認して屋敷に侵入する。屋敷と言っても主はデル一人。そのデルが居なければ、ただの空き巣なのである。急いで囚われた娘の部屋に向う。

扉を突き破る。

剣でグールになった娘2人の首を飛ばす。

そして檻の前に行くと、渾身の力で檻の一部を歪ました。

その間から娘たちは外に出る。

「助けに来ました。今は説明している暇はありません。村里にトミーという男の子が居ます。彼を探して、すぐにプレーメ村に行ってください」

「わかりました」と娘たちはエレノアに会釈し屋敷から脱出した。

エレノアは檻のある屋敷の部屋で気配を消し隠れた。現在の屋敷の主が現れる、その時まで。

「混じりもの、貴様はハンターなのか？」

エレノアは無視する。

「まあ、どっちでもよい。今、俺は新たな興味を沸いた」

エレノアを見ながらデルは言う。

「ダムピール。それはヴァンパイアを倒す力を持つ。しかし幾人もの血を吸った俺の力は以前とは比べ物にならない。つい自分の力を試したくなる。そして人の血でこれだけ偉大な力を得るのだ。ダムピールの血はさぞかし、それを凌駕するのだろうか」

そこまで言うのとデルが凄じ加速でエレノアに突っ込んできた。

あらかじめ警戒していたため、エレノアは難なくかわす。

「その身のこなしは、やはりハンターか」

楽しそうにデルは言った。

『こいつは狂っている』ダムピールの血を欲するヴァンパイアなんて聞いた事がない。自分の前に居るのは人の血に魅入られ自製の効かない吸血鬼。このままでは村全員がこいつの餌食になる。エレノアはそう思った。

「なんとしてもお前は倒さなければ」

「誰が誰を倒すって？」

「私だっ！！！」

静と動

今まで静を保っていたエレノアが動に変わる。

肩に背負っていた剣を抜き乱舞する。

デルもそれに対応しかわす。大きく後方へ移るデル。

……

「やるじゃないか。混じりもの」

デルの体中にいくつももの刃物で切られた痕が付いている。

牙を見せニヤつくデル。

「これじゃあ、いくらやっても致命傷にはならんぞ」

エレノアを挑発する。しかし、それには応じない。元ハンターだけに吸血鬼の戦いには手馴れている。

再びエレノアは高速で攻撃を繰り返す。それをまたデルは回避する。

そうやって、同じ作業が何回も繰り返された。

戦闘開始から30分が経過した。

デルの表情に余裕の笑みが消えた。

「おい、女いい加減にしろ」

エレノアが繰り返した攻撃。それは致命傷に至らないが繰り返される事で徐々にデルの体力を奪っていく。

エレノアの闘い方、それは長期戦に持ち込み相手を弱らせて倒す方法。時間は掛かるが勝敗率で言えば安定した戦法である。

しかしエレノアは内心、少々焦っていた。じつは最初の攻撃から徐々に剣の連射速度を増しているが、デルはそれに対応している。本人にわからぬように攻撃するエレノアの技量も凄いのだが、本能的に攻撃に慣れているデルは脅威であった。やはり幾人もの血の力は伊達ではなかった。実際、長期戦となりつつあるのに疲労気味はエレノアのほうなのだ。少しずつ力を増している分、エレノアに負担が掛かる。十八番である長期戦が徐々に彼女を不利にさせる。

「このままではやられる。ここで決めるしかない」エレノアはそう判断した。

ゆっくりと剣を構える。

「どつやら、やる気になったか」デルはエレノアの雰囲気を感じたように身を構えた。

「はっ
あ」

掛け声とともに走り出すエレノア。そしてデルに切りかかる。エレノアの剣はデルを突いた。しかし感触が薄い。

「うっ」

エレノアが床に倒れる。背部が大きくえぐられている。

サワツ サワツ と羽ばたく音が静かに降りてくる。

それは人より大きな蝙蝠であった。

「狙ったつもりかしらんが一番つまらん攻撃だったぞ」
蝙蝠が喋る。デルの声だ。

「俺は大蝙蝠のドラムロー族だぞ。情報不足だな」

倒れているエレノアにデルは馬乗りになる。

「新鮮なものを頂きたいが、お前は暴れそうだからな。残念だが」
そういうとデルは鉤爪をエレノアの腹に突き立てる。

ああああっ

！！！！

断末魔が部屋にこだまする。

エレノアの体から温もりが消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5235w/>

VK（ヴァンパイアキラー）ヴァイアント

2011年11月7日10時09分発行